

204
207

警
醒
時
論
全

020613-000-7

特30-988

警醒時論

リギョル/著

M31

ABI-0428



警
9

特38

佛國
リギヨル著
日本
前田長六譯

敬
醒
時
論
全

緒言

本書は必ず今日の讀書社會に歡迎せられざるべし、然れども其之に記載する事項は、今日の日本國民の最も注目すべき所なり、蓋し國民と個人に就ては同一の筆法を以て論ずるを得、個人には其己れに大益ある所のものをも聞て解せざる時期ある如く、國民にも亦斯の如き時期あり、是時に當りては如何すべき、時機の到來を待つより外道なし、時來らむ自ら之に教を垂れん、然れども記せよ、時なるものは嚴酷悲痛の師なることを、此師や悲嘆悔悟するも何ぞ其れ及むんと云ふ必迫の際に當りて、初めて人に沈痛の教を與ふるものなり、夫れ時の迫るに先だて、人其教訓警戒を利用すること難きにあらず、苟も

鑑みることを知り、讀むことを知る者、誰が能せざらん、然りと雖人間は奇怪の動物にして、毎々不可思議の事實を演ずる者なり、試に思へ、誰か目なき者あらん、誰か知なき者あらん、目は以て物を視る爲に之を有し、知は以て事を解する爲に之を有す、然るに古今の成敗を見て以て自ら鑑み、東西の歴史を讀んで以て自ら益する者、世果して幾人かある、夫れ前人の挫折失敗せる所以は、目ある者皆之を具瞻す、然れども自ら規戒して以て前人の覆轍を踏まざる者に至つては寥寥寂々たり、他國の盛衰興亡する所以も、知ある者は皆之を了解す、然れども自國を警醒して以て他國の殷鑑を利用する者は甚だ希なり、是を以て前車の覆りたる如く、後車も亦覆り、他國の倒れたる如

く、自國も亦倒る、古人も既に詠嘆して曰く、前人自ら哀むに暇あらずして而して後人之を哀む、後人之を哀んで而して之を鑑みず、亦後人をして而して復た後人を哀ましむるなりと、乃ち知る、自ら試むるに至らざれば、人の試みたる所を全く知らざるが如きは、古今東西の通弊なることを、此點に於ては個人の歴史と國民の歴史とは全然同一轍に歸するものなり、而して此事、何れの國、何れの民に就て驗するも、必ず其然るを見る、日本國民と雖、亦此圈内を脱する能はず、此民や今日文明の餘澤に浴し、其目其知は以て古來全世界に行はれたる事蹟を洞然目撃察知するを得、然れども是が爲に自ら警醒規戒して以て、海外諸邦の覆轍を蹈むの憂なしと斷ずるを得るや否や、

勿論日本は海外に例なき國なるを以て、必ずしも同一の筆法を以て論ずべからざる例外は之あらん、然れども其例外は不幸の點に於ても亦之なしとせんや、海外諸邦に於ては其成敗興亡の歴史は一朝夕にして演出せられたるものにあらず、蓋し國家盛衰の原因は百年乃至二百年の後に至りて初めて其結果を呈するものなり、如何なる長壽の人と雖、原因を植ゑて生前に其結果を見るに至るは甚だ鮮し、多くは其死後幾多の歲月を経過したる後、初めて其結果顯はるゝものなり、日本は之に反して、其進ひや一大長足の進歩を以てせり、其退くや豈亦之に比例せずとせんや、泰西の文明を一朝にして吸集したるは、吾人の驚嘆措く能はざる例外なれども、其衰亡の事蹟をも一朝

夕に演出するあらむ、豈亦寒心すべき例外ならずや、今の時に當りては政黨の軋轢、利害の競争、意見の衝突等激甚にして、闔國舉つて暴風 濤の中に在るが如くなるを以て、吾人一部の人士が警鐘を亂打して、世の猛省を促さんとすれども、其聲微にして、宛も陰風怒號の際に舟子の叫ぶ、異ならざるなり、今や世人の之に耳を傾けざるに當り、血を吐いて叫ぶも益なきを奈何せん、幸にして暴風は一時の顯象、海波は永遠狂翻するものにあらず、心界も亦終焉擾乱するものにあらず、萬物の常態は靜穩にして、世界の特性は平安に在るを以て、一時の擾乱は早晚必ず故に復し、地軸を震撼したる風濤も、造化の定めたる堤内に歸し去るに當つては、又々茲に一碧萬頃の海となり、

快明千里の天となるに至らん、此時彼の一時渦中に埋没したる岩石は、崔嵬として再び城壁の如く出現し、大海の中に屹然として聳立し、白浪來れを碎けて雪となり、高波寄せれを、つて其面を洗ひ、千秋萬古同一の地に位し、同一の面を持すると雖、陰風の一過したる後には、一層其雄威光澤を示すに至るものなり、眞理の世に在る亦此の如し、時に謬論の濁浪に濤はれ、時に先入の渦中に没せらるゝことあるも、情瀾慾覆の中に屹として峙立す、其風浪平ぎ、情慾靜まりて、凡百の謬論の雲散堙消するに當つてや、彼れ獨り萬古屹立して、赫然其光輝を放ち、暴風一過の後、人をして更に其麗はしきを感じせしむ。

余の今此書中に發揮せんと欲する所のものは即ち此眞理なり、今日世は俗論怪説の眇霧に鎖され、人は利己先入等の偏見に暗まされ、光輝を認むる者尠し、否、必要を認むる者だになし、彼の政海に、没して名奔利走する人士の如きは、全く之を忘却に附するもの、如し、然れども余は半夜孤燈の下に瞑目沈思して、此眞理の國家の基礎なることを想へむ、一日も、等閑に附し去らるゝを傍觀するに忍びず、余の宿論は、天下國家の盛衰興亡は此基礎的眞理の隱見顯晦に關すと云ふに在り、是を以て居常之を發揮し、之を擁護して、天下の人々をして其必要を知らしめんと欲す、是亦愛國事業の一端なりと信ずれむなり、夫れ國家の爲に恐るべき敵は、豈

外部にのみありとせんや、國民の良心を腐化し、社會の風紀を紊亂し、道德の基礎を破壊しつゝあるもの、執れば是れ其敵ならざらん。而して拜金利己の主義、唯物無神の學說等は是れ其尤なるものと知らずや。今や日本現時の社會を觀るに、物質的文明と共に同主義は到る處に實行せられ、歐學新來の結果と共に全學說は非常に珍重せられつゝあり、世人は尙未だ其主義其學說の惡果を見ざるもの、如しど、雖、識者は既に之を見る、若し此際正道を規畫し、眞理を扶植するに務めずんば、國家の前途甚だ危殆なるものあらん、余不敏と雖、極力以て茲に従事せんと欲す、苟も天下の憂に先つて憂ふる者、亦來つて茲に努力せられよ。

余は今此基礎的眞理を明瞭的確に發揮せんが爲に、四個の人物を假想し來りて、談論風生の間に充分に之を論議せしめんとす、此四個の人物は假想と雖、其人は皆現時の社會に在るものなり、余は單だ 名を假命して讀者に 實を冥想せしめんとす。

老政治家 直江義政

哲學博士 淺井哲次

道學士 海野千廣

神學博士 本城篤信

是れ皆政界に、學海に、又教界に游泳する人にして、多少 名聲を馳す、疇だ最後の人物は尙未だ世に容れられざるが如し、人も

亦敢て世と競ふを欲せざるもの、如し。

卷中四子の抱懐する思想、主張する學說扞格牴牾して、水火相激し、み鑿相容れざるが如きは、全く今日世上に於ける紛々籍々の状、を畫けるものなり、故に卷中の議論は世上の議論と全く全一にして、其主義學說等亦皆世上流行のものなり、若し夫れ此四個の對談者が經驗の光に照されて、全主義學說より推理演譯する結論に至つては、皆是れ論理の勢に因つて、早晚必ず未來の社會に發生せらるべき結果なりと知らるべし、何となれを支撐せられざる物體は必ず地下に墜ちんと云ひ靈魂の蟬脱したる人體は必ず 生命を失はんと云ふが如きは、必ずしも預言を須て後知るべきにあらざれをな

り、余は聰明なる讀者を推薦して以て、此言論の席に列せしめ、四子が國家の基礎的眞理に就て一上一下する大議論大舌戰を目撃耳聞せしめんと欲す。

明治三十一年二月

師父リギヨル氏の意を承けて

前 田 長 太 識

警 醒 時 論

佛 國 リ ギ ヨ ル 著
日 本 前 田 長 太 譯

直江「今日は是れ如何なる日ぞ、洵に千歳の一遇と謂ふべきなり、愚老豈諛言を呈せんや、諸君は皆是れ明治今日の録々たる人物、今や一場に相會し、胸襟を開て以て時事を論じ、高論崇議して以て哲理を談せんとす、豈亦快ならずや。」

海野「録々たる人物とは何ぞや、吾人にして果して録々たる人物ならん、翁の如きは蓋し人間以上の人物と謂ふべきなり、而して今や吾人其警咳に接して、高教を仰ぐを得、千歳一遇の言、寧ろ先づ吾人の口より發すべきなり。」

直江「愚老に對する品評は一に諸君の口に委す、然れども愚老豈亦諸君の價値を看取

せざらんや、諸君は皆是れ學士の榮名を擔へる者にあらずや、曰く神學士、曰く哲學士、曰く道學士、何ぞ其れ其名の美にして且人の耳に快なるや、愚老の如き老朽漢は未だ神學の神の字をも知らず、哲學の哲の字をも解せず、道學とは其れ黃老の學を謂ふか、……否倫理學と……嘗て人の之を口にすることを聞けりしが、未だ其何物なるやを知らず、想ふに高尚の學問ならん、愚老の學びし時に當つてや、神學、哲學及び倫理學等の如き、學者の口の上ることなかりき、爾來世は進歩したれども、愚老は依然昔時の愚物なり、敢て負惜みを言ふにあらざれども、蓋し之を學ぶの時なかりき。」

本城「人誰得知萬」(Nec scire fas est omnia)とはホラシウスの言、一人にして萬學藝に達するは、昔はイザ知らず、今の世に於ては能はざる事なり、博覽強記、博學多才等の熟語は古人多く之に當れども、學問の範圍廣漠無邊の今日、咄何物の不遜漢ぞ、敢て之に當らんとする、夫れ古と雖萬學者(Doctor universalis)を以て稱せられたる者は極めて稀なり、聞く、古より今日に至る迄萬學者は僅々三人のみと、曰くプラトン、

曰くオグスチヌス、曰くボスエ、アリステテレスの如き、トマス、アソイナスの如き、其學達しと雖、未だ博しと謂ふを得ず、今人動もすれを博識多才を以て人をも稱し、自らも任ずれども、是れ誤れり、若し比較的に博識多才なりとせむ、或は其當を得ん、無學文旨の愚物に對しては、淺學の者と雖亦是れ一の博識者なれむなり、烏なき郷の蝙蝠、盲者千人の世の中に於ての物知り、呵々……不覺贅言を費せり、幸に恕せよ、夫れ翁は萬に該通せずと雖、一に精通せり、國を治むるの學即是なり、此學や實學なり、空理の學と大に其撰を異にす、然らむ則ち翁何ぞ萬に通せざるを憂へん、亦以て一に專なるを誇る可きなり、翁は彼の技師の如何に其製作せる器械を精知せるやを知らん、之を運轉する機關、發條等一として其眼に漏るゝものなし、是を以て彼れ其器械を運轉するや、自由自在にして、殆ど意を用ゐざるが如し、翁の政治機關を運用するの妙亦此の如し、國を治むるは蓋し翁に取りて一遊戯のみ。」

直江「君の言を聞くときは、君は未だ國家の柄を手に取りたることなきが如し、政治機關は決して君の口の如く廻轉するものにあらず、今の時世に當つては最も其難きを見

る、古は民に之を知らしめざるも、猶ほ善政を布くを得たり、今や然らず、蓋し由らしむべくして知らしむべからざるの時代は既に己に遠く去れるが如し。」

海野「洵に翁の言の如し、今の臣民は政府に支配せらるゝ者にあらず、政府と議論する者なり、政府の事を行ふや、必ず其理由を人民殿の前に説明せざる可からず、否らずんば民権赫として怒る、若夫れ理由を説明せずして民に命ずるが如きことあれを、其返禮として直に『壓制』の二字を呈す、今の政府たる者嗚呼亦難い哉。」

直江「尙焉より甚しきものあり、今の民は往々口にして曰く、文明國の民は自ら治まるべき者、豈他より治めらるゝ御心配に預るを要せんやと、敢て問ふ、君も亦此民の徒にあらざるか。」

海野「翁何ぞ之を言はん、今日の民如何に長足の進歩をなすと雖、未だ容易には此點に達せず。」

浅井「然らむ君は此點に賛成を表せざるものか、日本臣民をして米國の民の如く自ら己を治むるに至らしむるを企圖せざるか。」

本城「國民自治の論は耳に快なり、若し此説今日の青年社會に傳はらむ、必ずや多くの雷同者を出さん、然れども僕は其時の長上者の爲に悲まざるを得ず、蓋し民治の困難意想外に出づべけれむなり。」

浅井「才物出るあらむ、何ぞ之を憂へん、古へに例なきにしもあらず、君は彼のペリクレスの事を記憶せずや、彼れ議會に出で、雅典の民に演説するに當つてや、必ず先づ自身を戒めて曰く『ペリクレスよ、爾今自由の民に語らんとするを忘るゝ勿れ』と、當時雅典の民は如何に其自由を固持し、如何に其民権を主張せりと雖、彼は是を以て巧に國政を料理するを得たり。」

本城「浅井君、君は一事を遺忘したり、ペリクレスが如何に國政の料理に妙を得たりとするも、當時共和政治の隆盛は果して幾年間繼續するを得たりとするや、樺花一朝の榮は吾人の希望する所にあらざるなり。」

浅井「僕は歳時年間の争を爲すにあらず、一國自治の制は果して行はれ得べきや否やの一事を論せんと欲するのみ、君は此事を絶体的不能に歸せんとするか、將た唯だ一

の困難事業なりと言ふに止まるか、困難々々と言はゞ、何事か困難ならざらん、能く其困難に打克ちてこそ初めて絶代の偉業を爲すを得べけれ、敢て問ふ、其困難の程度果して如何。」

直江「愚老に取りては問題頗る奇、議論亦頗る其歩を進めたるが如し、唯々耳を傾けて二君の高説を傍聴せんのみ。」

淺井「不遜と雖、請ふ腕より言はしめよ、本城君、君は人長じて二十四五の年齢に達すれど、自ら其身を制理するを得と信するや否や。」

海野「如何にも二十四五の年齢は、人をして自家制理の地位に立たしむる時なりと雖、内外四邊より不時不測の障害起り來れど、圓滿に之を行ふこと極めて困難なり、況んや一の家族を有して之を制理せんと欲するをや。」

淺井「圓滿に行ひ得るや否やの論にあらず、事果して出來得べきや否やの論なり。」
本城「事此のみに止まらむ、其出來得べきや論を待たず。」

淺井「然らむ歩一步を進めて論せん、國民は人々個々の集合して以て成立せるもの

なり、人々個々と云ふと雖、僕は丁年に達せる個人を指して言ふなり、何となれを政治學に於ては、少くとも今日に至る迄、兒童と婦人などを國民に計算せざれむなり、果して然らむ、離れて自家制理の地位に立ち得る者、合して自治の制を行ふ能はずと云ふ事はなかるべし、唯々然り、個人としては能くす可く、國民としては得て能くす可からずと云ふ理由、我れ其那邊に存するやを知らざるなり。」

本城「一家を制理すると一國を制理するとは其間に區別あり、一家二百人の家族を有すと雖、巧に之を制理する者はあらん、然れども同胞四千萬以上の一國を制理する事、豈其れ日を同うして語る可けんや、理論と實際の論必ずしも言はず、試に思へ、人の器量は猶ほ器の如し、入るべき丈け入るを得るなり、四千萬以上の人民、器ならざる君子と雖亦之を如何せん。」

直江「然れども君若し仔細に人の器量を測らむ、必ず奇怪の現象を見るあらん、凡人は其腦蓋の大小如何に係らず、何れも皆世界を狭しとするの概あるものなり、彼の局量偏淺、規模早狭の人と雖、自家の裁判に於ては敢て人に一籌を輸せざる者と信ず、

今諸を事實に就て思へ、苟も今日新聞紙を讀むを知る者は、誰か我こそは國の要路に立つて時の政府に獻策すべき者と信せざるものある、是等の點より觀察するときは、今日の人民は歩一歩づゝ二君の問題(自治制)に向つて進みつゝあるもの、如し。」

本城「果して此の如くんを、不日從來の考想語調を改めざる可からざるに至らん。」

直江「何の謂ぞや。」

本城「今までは人々口を開て社會の事を論ずるときは、必ず之を人体に比して語れり、曰く人身に於ては四支五体各其所を得、彼此相待ち相助けて以て一致の動作を爲す、而して頭は其上に位して之に指令を傳ふ、蓋し腦髓は頭蓋に在りて、手や足に在らざればなり、人間社會の成立亦此の如しと云ふが如き語調は、古來常套の言にてありたり。」

海野「古は此譬喩極めて妙なりき、然れども今は既に陳腐となれり、何となれを所謂新教育なるもの行はれたる以來、足と頭との區別日一日に滅却すれをなり。」

本城「此勢を以て趨かむ、日ならずして上下皆腦髓のみとならん。」

海野「事茲に到らざるも、從來の足一躍して頭の位地に立つて、優に腦髓の天職を爲

し得るに至らん。」

本城「然れども足は始終多數を占むべし、兎に角に此の如き時勢とならんを、社會は觀物なるべし、僕は其時まで天より年を拜借せんことを欲す。」

直江「不急の察は即是れ無用の辨なり、宜しく棄て、治めざるに如かず、來年の事を言へん鬼が笑ふと云ふにあらざるや、請ふ未だ來らざる事に空想を畫かずして、現下の實地問題を研究せん、諸君若し意あらむ、愚者は淺井君の議論に就きて卑見を陳せんと欲す、如何さま淺井君の言の如く、國民は人々個々を以て成立するものなり、然れども、今日常の試験を以て之を考ふるに、所謂人々個々なるものは、其地位學識の如何に係らず、何れも皆一の志に依つて行動する事は、争ふ可からざる事實なりとす、行樂を志す者、歡樂遊戯を是れ事とし、富貴を志す者は、貨殖の道に奔走し、功名に志す者は、萬事を賭して茲に熱中す、總て皆此の如し、故に志なるものは人々着歩の出發點にして、行の主、動の師、萬事の樞機なり、今日の所謂主義なるものも亦此に外ならずと信ず、何となれを今人は皆我主義斯々なり、我主義云々なりと云ひて、其主義

の爲に東奔西走しつゝ、あれをなり、又事の實際に於ては、人間の性行の主義より流れ出づること、宛も彼の水の源より出で、果の因より出づるが如し、主義は人の品性を作り、特質を顯はす者にして、我の以て他人に異なる所以全く此に在り、主義なきときは、思想定まらずして、操行常に搖動す、亦曷ぞ氣節を有するを得んや、一言以て之を蔽へむ、主義なきの人は人にあらざるなり。」

本城「翁は實に人間學に精通せり、今の心理學者も三舍を避けん、翁の言の如く主義なき人は氣節なき人、氣節なき人は人間の半分以上を失ひたる人なり、然れども此人間の半分以上を失ひたる者、何ぞ其れ今の世に多きや、試に思へ、明日あるを期すべき人果して幾人ぞや、滔々たる天下、皆是れ昨是今非の没氣節漢のみ。」

直江「君の言少しく矯激に失するが如し、然れども愚老をして語を繼がしめよ、議論半心にしては淺井君に對する答案とならず、……夫れ國民は人々個々……人々個々の語餘りに煩しけれむ、自今單に個人と言はん、是亦文字上の經濟なり、夫れ國民は個人を以て成立するものなりとせむ、其個人に取りて必要缺くべからざるものは、國

民に取りても亦必要缺くべからざるや論を待たず、果して然らむ、主義なるものは個人に取りて須臾も缺くべからざるが如く、國民に取りても亦一の主義なくんむあるべからず、固より主義には種々ありて、人々任意に之を撰ぶことを得と雖、愚老の語る所は片々たる主義を云ふにあらず、能く凡ての主義を支配して、國民一般の行動を規畫するものを云ふ、國民の品性を作爲し、其特質を發揮して、一國の魂となるべき大々主義を云ふなり。」

海野「日本國民の如きも亦此國靈的大々主義に依りて、今日まで國威國光を發揚しつゝ、獨立の生活を爲し來れり、而して此國靈的大々主義の那邊に存するやは、人皆之を知る、否全世界皆之を知る。」

淺井「日本は今も尙此主義に依りて活動しつゝ、あるものなり、君も亦知るなるべし、識者が日本主義を擴張し、愛國の精神を鼓吹するが爲に、萬事を賭して茲に鞠躬盡瘁すること、近年に至りて一肩を加へたることを、否々、國の魂は未だ死せざるなり。」直江「然り、幸にして未だ死せず、然れども茲に愚老の解せざる一事あり、一方に於

ては此の如く熱心に國粹主義を絶叫すと雖、他の一方に於ては全く之に反して、公然世界主義を唱道し、甚しきは歐化主義を主張する者あるは何ぞや、此は是れ右手に建設する所、左手に之を破壊するにあらずや、愚老の憂慮する所正しく茲に在り。」

浅井「然り、之あり、然れども建設する者と破壊する者とは同一種の人にあらざるなり。」

直江「愚老も亦如何なる人と雖故さら其國を破壊せんと企つる者なきを信ず、然れども其主義より自然發生する結果は、國家破滅の方面に傾流するを奈何せん、請ふ仔細に鑑考せよ、今日或る學者、或る博士、或る新聞記者までが、各自滿腔の熱血を絞つて其新主義若くは其舊主義を主張確執するの結果、人民の腦裡に古今未曾有の混沌を醸成するにあらずや、此の如きときは智慮ある人民と雖、其適從する所を知る能はざるなり。」

浅井「此點に於ては、日本帝國は翁の言はるゝ如く、前代末聞の世紀を辿りつゝあるなり。」

直江「人或は此世紀を以て光榮の世紀と爲すものあれども、實は危険の世紀なるを忘るべからず、思想混亂の世紀、豈寒心せざらんや。」

浅井「如何なる思想混亂すと謂ふや。」

直江「試に社會の寫眞鏡と謂はるゝ彼の新聞雜誌を讀め、算數學の如き到底其反對を容さざるものを除くの外、諸事萬端、凡ての方面に於て反對なる主義思想の紛糾錯叉する、殆ど言語に絶す、就中哲學、政治、道德、宗教等に於て最も然りとなす、今は實に主義思想の無政府時代と謂ふ可し、神代の混沌時代も恐くは此には及むざらん。」
海野「古代物質世界の混沌も一たび完整して、今や既に其影もなし、今日の智識界の混沌も早晚完整して、其跡を絶つに至らん。」

本城「然れども時世は因循なるものにあらず、古來の經驗に據れむ、主義思想の混亂は、忽ち志操行動の混亂となるものなり。」

直江「吾人は今日既に此混亂の幾分を見る、藥を投ずるは今や其時なり、昔は斯る無政府時代を預防するが爲に、一の根本的手段ありたり、四民の學ぶべき所、行ふべき

所は、何事に就ても初めより之を確立一定したる事是なり、當局者は皆此主義を定規として、國政の一致を計り、民治の統一を謀りたり、勿論此事は凡ての方面に於て完全なりきとは謂ふを得ざれども、是が爲に或る一方に於て大なる効益ありたる事は、掩ふ可からざる事實なりとす、此の如くにして四民も各々其主義を有し、一國も亦一の主義を有することを得たり、想ふて茲に到れど何となく昔戀し。」

淺井「今日に在りては此事壓制の沙汰と叫ぶるゝを知らずや、開國の人民を此の如く同一の模倣の中に入れて、當局者の自儘に之を鑄造するが如きは、虐政も亦太甚し、壓制虐政の論は姑く措くも、今日精神氣象を異にする四千餘萬の人民を驅つて、全く同一の觀念を懐かしむることは、不能の沙汰なり。」

直江「全く同一の觀念を懐かしむると云ふも、凡ての事に就て言ふにあらず、世には人々各々其是とする所を採つて妨なき問題一にして足らず、此の如き問題に就ては、人々如何なる裁判を下すも、如何なる言論を戦はすも、個人の操行、社會の公安に毫も關せず、然りと雖、凡ての事皆然りと言はんや、茲に基礎的真理なるものあり、個人

の行爲と社會の道義とに密接の關係を有するを以て、之が採否は論理の勢に依りて直に公私の言動の上に著しき影響を及ぼすこと必せり、斯る基礎的真理に就て、主義確定せず、民をして各々其好む所に任せんか、社會の道徳其れ何を以て立たんや、古の爲政者が統一の制を立て、以て、四民をして嚴重に之を守らしめたるは、蓋し此の如き基礎的真理に就てなり、愚者は今日に於ても亦之が統一の制を布かんことを欲す、然らずんば社會は臣民の異論異説の爲に遠からずして其基礎を失ふに至らん。」

淺井「翁は吾人をして四十年前の昔に退歩せしめんとするか。」

直江「否々進歩を冀ふ點に於ては、愚者決して人後に落ちず、我日本をして鞏固不拔の文明國となさしむる事、是れ愚者畢生の心願なり。」

淺井「請ふ審に翁の説を聽かん。」

直江「夫れ君も知れる如く、我日本は開國以來、文物制度の上に空前絶後の改革を行ひたり、慧眼なる日本臣民は、歐を究め、米を搜りて、其英を含み、華を咀ひ、之を同化して以て我物となし、遂に今日の如き『明治維新の日本』を現出するに至れり、然

らむ則ち先きに愚老の并列したる哲學、道德、政治、宗教等に就ても、何故此の如く爲さざるの理あらんや、審に歐米の政教哲理を研鑽して、其眞を抜き、善を撰び、在來の日本國粹主義に合ふべきものは之を探り、合はざるものは之を捨て、以て諸君の口に贈炙する『新日本社會の基礎』を建設するも、亦可ならずや、基礎建設問題は極めて重大なり、何となれた基礎なくんを、新日本は如何に富强雄大なりとするも、亦是れ空中の樓閣、沙上の邸宅に異ならざれんなり、豈能く其久しきを持せんや。」

淺井「如何なる基礎を謂ふや。」

直江「無論之を支持するに足る原理的主義を謂ふなり、何となれた今は社會的家屋に就て論ずるものにして、其本となり石となるものは則ち是れ合理的人間なれんなり。」

海野「社會的家屋を支持する原理的主義と云ふときは、一國輿論の認定を経たる基礎的眞理なるべきを前提す、然れども一國の輿論を占むるは、容易の業にあらず、其故如何と云ふに、民に若し自由ありとせむ、其自由は正しく此の如き基礎的眞理を認定するに顯はるれんなり。」

直江「然れども眞理なるものは、眞誠なる哲學者の言ふ如く、果して實在的のものなりとせむ、一たび之を明に提示するものあれば、民皆直に之を認む可きにあらずや、既に之を眞理なりと認めたる上は、取つて以て之を社會の基礎なりと確定するに於て、何の難さか之あらん、愚老は却て之が反對に出づるの難さを覺ゆるものなり、光の前に出でて、是れ光にあらずと拒否す、豈得んや。」

本城「翁の所論今回のみは理論の一方に傾きたるが如し、理論上より觀れむ、實に翁の言の如し、然れども實際に於ては必ずしも此の如くならず、蓋し人間の中に頑迷なる盲者ある如く、社會にも亦其者あり、先入の爲に暗まされ、利害の爲に迷はされて、見ぬ爲する者、何れか是れ頑迷なる盲者ならざらん、稱して之を心の盲者と云ふ、而して世は常に此心の盲者多數を占むるものなり、故に又「盲者千人の世の中」とはいふなり。」

海野「余が一國の輿論と謂ふものは、此の如き徒の口より出づるものを謂ふにあらず、白晝太陽の存在を拒絶するが如き狂的盲者ありとせむ、宜しく放棄して其爲に任せよ、

是れ唯一の便法なり。」

直江「然らば眼を開いて眞の光を見る他の人民が相手なり、然れども亦茲に一の困難なくんむあらず、敢て問ふ、如何なる手段を取りて、此人民に基礎的眞理を認定せしめんとするや。」

浅井「此民に之を命ずるは、全く不能なり、強めて之を命ずるも、彼豈爲さんや。」

海野「既に言論の自由あり、既に信教の自由ありて、渾ての自由を味ひつゝある以上は、此事を認定せしむるにも、無論自由を以て爲さしめざるべからず、蓋し自由を缺ける認定は認定にあらざれむなり。」

直江「然らば則ち事先づ茲に一決したり、曰く合理的の人民をして、其自由の精神を以て、或る基礎的眞理を認定せしむる事、是れ議論の要點となれり、是より解釋すべき所一に此問題に限れり、諸君は如何に之を解釋せんと欲するや。」

海野「時なる哉、時なる哉、曩に吾人の對談に入りたるペリクレスの言を想記提出すべきは、今や其時なり、曰く『ペリクレスよ、爾今自由の人民に語らんとするを忘る

ゝ勿れ』と、之を應用して宜しく云ふべし、曰く『爾今自由なる人民に基礎的眞理を認定せしめんとするを忘るゝ勿れ』と。」

本城「君は未だ問題を解釋したるものにあらず、問題を解釋するの心得を示すに、『エグオール』『エキス』云々の數學的口調を以てしたるのみ、思はず言茲に出づ、海野君、失敬の罪恕し給へ……余の見を以てせむ、手段は一のみ、他莫し、自由ある人民の前に、先づ基礎的眞理を提出し、有ると有らざる證據を列擧して、明快に之を説明論證し、一點一畫も不明不確の所なきに至らしめて、民をして喟を容れ疑を挟む餘地なからしむる事是なり、果して此の如くに至らむ、設ひ自由ある人民と雖、亦是れ一の合理的人民たる以上は、必ず之を認定せざる可からざるに至らん、是れ蓋し太陽炳然赫出するときは、明者は之を拒否する能はずと云ふ理より打算したる議論なり。」

直江「浅井君、君は本城君の議論を聴取せるか、同議論は君に宛てたるものなり、必要歟可からざる眞理を明瞭確的に教ふるは、哲學者の本分なりと知らずや、凡そ學者は、皆各々其研究すべき特殊の目的物を有す、哲學者も亦然り、物理、道徳、政治

等の上に原因結果の論を應用して、所謂之が主義なるものを確立一定するは、即是れ哲學専門家の直接從事すべき所なりとす。」

海野「『事物の原因を格知し得たる者は幸福なる哉』 (Felix qui dicitur rerum cognoscere causas)。」

直江「哲學の提出する原理は、多くの人々見て以て空理と爲せども、其結論に至つては萬民の均しく實行すべき事なり、人間の一生を規定し、社會の行歩を照導するものは即ち哲學上の原理に外ならず、然れども此事を一國の上に普く行はしむるものは、大學校の高坐なり、敢て問ふ、今日の哲學教授は此天職を竭すことを得るや否や、其教授する哲學なるものは果して此効果を奏すべきや否や。」

淺井「我邦茲に従事する者は、早晚國民に完全なる哲學的國家教育を授けて、眞理を渴望する人知の要求に應じ、幸福を目的とする民心の希望を滿さしめんことを期せざる者なし、吾人不肖と雖、亦將に此目的を以て一臂を揮はんと欲す、唯だ奈何せん、之が奏効を期する爲には、時尙早し。」

直江「諸君の今研究しつゝある所は那邊に在るや、將た其哲學的研究は何處まで達せしや。」

淺井「從來吾人の知悉したる支那哲學、印度哲學の外に、遠く泰西の學界まで臻り、上はソクラテス、プラトン、アリストテレスより、下はカント、ヘゲル、ハーバート、スペンサーに至るまで、悉く之を講せざるはなし、然れども設令各々皆貴重なる眞理を寶藏すと雖、亦皆各々著明なる誤謬を含蓄し、且其哲理主義たるや之を應用するときは、往々我邦の人情風俗に背反する所あるを以て、今日吾人の第一着に憤勉すべき所は、先づ仔細に其眞偽を分拆し、然る後其我國情民俗に適合するものを撰擇するに在る事は、慧眼なる學者の皆一致する所なり。」

直江「企業や大なり、學者誰か之に賛同せざらん、諸君それ憤勵一番して以て奏効を期せよ、此の如くにして世界の知識を參酌し、東西の思想を鎔鑄し、以て一國混亂の狀態を匡正するあらむ、其國家に貢獻する所決して小少にあらざるなり。」

本城「淺井君の主義は、一言以て之を蔽へむ、曰く折衷主義是なり、君は頗る此主義

を尊拜するが如し、亦勉めて之を人に尊拜せしめんとするが如し、然れども僕は問ふ、君の所謂折衷主義なるものは果して實際に行はれ得可きや否や。」

浅井「精神一到何事か成らざらん、僕は決して其不能を見ざるなり。」

本城「理論上其れ或は然らん、如何にも此事先天的不能にはわらざるべし、然れども實際に於ては果して如何、古來茲に従事したる學者一にして足らず、今より凡そ一千六七百年前の遠き昔に、アレキサンドリヤの哲學者先づ之を企てたり、而して馬鹿を見たり、爾來此企業を想像したる哲學者處々に出没したり、然れども亦皆馬鹿を見たり、最近世紀に當り、ウィットル、シューマン又々茲に従事したり、而して又々馬鹿を見たり、君も亦其二の舞を演じて馬鹿を見んと欲するか、果然馬鹿に貼ける薬はなきものなり、若し後進の哲學者にして茲に成功するを得んには、先進の哲學者は疾く既に茲に成功したりしならん、若し一朝夕にして之を企て得べしとせむ、上下一千六百年の間には必ず功を奏する得たるなるべし、他の科學に就てはイザ知らず、哲學の一科に就ては古人は遠く今人に優りたり、今日の哲學者なるものは、古人の哲學幼年生にも企

及せず、然るに若し此哲學幼年生にして此事を成就するを得とせむ、何爲ぞ彼の古今獨歩の老哲學者は之を成就するを得ざりしか、抑々又古の老哲學者は今日の幼年生に此業の成功を譲りたるか。」

浅井「古に成功せざるを以て今日も亦成功せずと謂ふ可からず、再三失敗の歴史を重ねたるを以て、終焉失敗を免かれずと云ふが如き議論は、僕亦承服する能はざるなり、世界は絶えず進歩す、古へ不明のもの日々明瞭となれり、昔人の嘗て夢想せざりし所、今人は眼前に之を目撃常用して怪まず、所謂新事業、新思想なるものは、今日到る處に行はれ、到る處に産み出さる、然らむ則ち何爲ぞ人知の要求に應じ、民心の希望を満すべき國家須要の哲理的折衷主義のみは、終焉其成功を見るべき期なしと言ふや。」

本城「僕は君の希望を剝奪するを欲せず、否、君の抱負を蹉跎せしむるを欲せず、然れども飽まで献言して君の注意を促さんと欲す。」

浅井「如何なる言なりども、献じ給へ、矯激の論も敢て避くる所にあらず、君若し他山の石とならむ、是れ僕の大に好む所なり、衝突より石火出づるにあらずや。」

本城「然らば先づ問はん、君は折衷主義を確立せんが爲に、如何なる處に其根據を置かんと欲するや、凡そ人家屋を建設するときには、必ず先づ其土臺を据付くるを以て始めとす、主義を建設するも亦然り、其根據を定立するは即ち是れ第一着の問題なり。」
 淺井「古來同問題を講究したる哲學者は僂指に違わらず、此點に於ては幸に典據とすべき者なきを憂ふるを要せず、今之を選定せんと欲せむ、是れ日も足らざる可し。」
 本城「然れども僕は信ず、恐くは其選定も亦困難なるべしと、君若し人間の典據に基いて、君の折衷主義を建設せんと欲せむ、其典據は如何に高名なる哲士のものなりとするも、君の企業は到底成功の曉に達する能はざる可し。」

淺井「何を以て之を言ふ耶。」

本城「人間は如何に高名なるものと雖、人と相共に意見を同うすと云ふ事は極めて稀にして、往々一目瞭然たる真理の初歩に就ても、區々の異論を戦はすを以て常とするものなり、例へば君若しプラトンの學に基いて立言するあらむ、人は必ずアリストテレスの學を揚げて君に反旗を翻さん、而して是れ必ずしも一理なしと謂ふ可からず、何

となれむプラトンは思想高崇、言論雄大にして、能辨達文の哲士を以て鳴ると雖、アリストテレスは學術深湛、議論精確にして、其主義の大に學理的なるを以て之に優る者なれむなり、若し夫れセノンの權勢に至てや、如何に尊大なりと雖、彼は一個の嚴格なる道德論者にして、單だ徳をのみ語れるを以て、快樂主義を取れるエピクルス門人に取りては、毫も其權勢なきものなり。」

海野「今の時に當りてはエピクルス主義最も勢力あるが如し。」

本城「是亦或る一部の人士間に於てのみ、凡ての人々の間に於ても然りと云ふ能はず、現に君の如きも、之が熱心なる反對論者にあらずや、君の道學主義とエピクルスの快樂主義とは、水火相容れざるものなり。」

海野「如何にも君の言の如し、是を以て僕は滿腔の熱血を絞りて、快樂主義の排撃に従事するものなり。」

本城「それ此の如し、三人相會するも尙其意見を異にす、況んや世に出で、大に其主義を主張せんとするに於てをや、淺井君、君若しカントを根據として旗を掲ぐれば、人必

ず君に反對して曰はん、否、カントは不倫理的なり、彼は其原義より凡ての結論を釣出せざる者なり、如かずヘーゲルの論理的なるには云々と、君若し獨逸に左祖せむ、人必ず英國を擔ひ來りて、ベーコンは如何と語らん、而して他の人は又々佛蘭西を引き出して君に語りて曰はん、哲學者の在る何ぞ必ずしも獨英のみに限らん、佛は哲學者の淵藪なりと知らずや、デスカルトの如き、ボッスエの如き、パスカル、フェロンの如き、皆是れ哲學者の鋒々たる者にして、獨英哲學者の遠く企及せざる所なり、君の賢にして未だ之を知らざりしかど。」

淺井「僕は或る哲學者の一主義をのみ採用せんと欲するにあらず、僕の所謂折衷主義なるものは、一哲學者の發子的主義とは大に異なり、古今東西の哲學者中より、其眞其善なるものを撰拔し、參酌鎔鑄して以て古今未曾有の一大新主義を作らんとするに在り。」

本城「僕明に君の意を了せり、然らむ君は斯る折衷的の大事業に單身以て當らんと欲するか。」

淺井「何物の不遜漢ぞ單身以て之に當らん、斯の如きは想像するだも尙且自負の太甚しきを覺ゆ、此企業や廣大無量の學殖あるにあらずんを、得て行ふ能はず、之が成功を期せんには、國內凡ての學術、凡ての經驗を一途に集中せざる可らず。」

本城「此點に就ては僕も亦君と同感なり、然れども君は如何に天下の學術經驗を傾けて之に當るも、古今東西の千種萬別なる異論、異説、異主義を檢覈するに當り、果して如何なる規矩標準に基いて、其眞僞善惡を識別せんと欲するや。」

淺井「僕は他に之が規矩標準を有せず、我固有の理性あるのみ。」

本城「然れども尙其外に要するものあり。」

淺井「何ぞや。」

本城「他莫し、此は眞なり彼は僞なりと明瞭的確に識別せんが爲には、先づ第一に眞理とは如何なるものかを明確に知らざる可からず、然るに今や君之を知らず、何となれむ君は正しく今其眞理を探求せんとしつゝある者なれむなり。」

淺井「僕之を探求しつゝありと雖、何ぞ之を知らずと言ふを得んや、僕は茲に再言す、

曰く我は理性を有すと、我理性の眞偽を識別するを知るは、猶或眼の明暗を分くるを知るが如きなり。」

本城「君は理性を有すと云ふ、僕之を了す、然れども記せよ。古來の哲學者も亦皆之を有せり、今君の研究に上る哲學者中誰か之を有せざるものあらん、而かも彼等の多くは失禮ながら君の理性よりも數等優れたるものを有したるや明なり。」

淺井「然れども彼等は吾人今日有するが如き光明を有せざりき。」

本城「其れ或は然らん、然れども知腦の耕田狹隘にして、學問の範圍廣からざる時は、誤謬の原因、懷疑の理由も亦隨て自ら尠きものと知らずや、今日の學界は廣且大なりと雖、誤る可き原因、疑ふ可き理由亦之に準じて多く之あり、此の如き古今相異の議論は兎も角も、古來哲學者が主義意見を異にして、甲論乙駁したる事は、争ふ可からざる事實なり、彼のプラトン、アリストテレス、ゼノン、エピクルスの如き哲學者は、皆是れ同じ世紀に生存したる者なり、然るに尙且門を樹ち、派を分ちて、相互に紛々藉々の議論を逞うしたり、人生必須の基礎的眞理に就てすら、各派の議論區

々に岐れ、甲の是とする所、乙之を非とし、彼れの肯定する所、此之を否認し、人をして眞偽正邪の何くに在るを知らざらしめたり、豈帝泰西の學界のみ然りとせんや、和漢に於ても之が例に乏しからず、我邦の學黨學派に就ては姑く言はず、翻て支那古代の儒學を視よ、韓愈は巧に之が状態を抽出して曰く、漢に黃老あり、晋宋齊梁魏隋の間は佛あり、其道德仁義を言ふ者、楊に入らざれを即ち墨に入る、墨に入らざれを、則ち老に入る、老に入らざれを、則ち佛に入る、彼に入る者は必ず此に出づ、入る者は之を主とし、出る者は之を奴とす、入る者は之に付き、出る者は之を汗とす、噫後の人其仁義道德の説を聞かんと欲す、孰れに従て而して之を聽かん云々と、噫今亦君も此の如き學黨學派に就き、此の如き異論異説に入り、其れ何を標準として以て其眞偽を識別せんや、君は先づ自ら身に省みて果して之を能くすと信ずるか、誤るの憂なしと爲るか、疑ふ可き機なしと思ふか、而して之を人に傳へんとするに當つては、果して如何なる方法手段を取るべきか、君の歩は如何なる場合にも徑路に落ちずと斷言するを得るか。」

直江「嗚呼淺井君にして哲學上能く之を行ふを得とせば、幸福敏腕の士と稱すべきなり、愚老の如きは、政治上能く茲に成功せず。」

淺井「翁の茲に成功せざるは、毫も怪むに足らず、夫れ政見を人に賛同せしめんとするが如きは、余の主義と大に其趣を異にするものあり、何となれを政治上に於ては始終個人の利害なるもの隨伴するを以て、利害の觀念に驅らるゝ政客の見を一にすることは、到底能はざる事なり、余の所謂主義に於ては、此の如き利害論は毫末もなし、單に眞理あるのみ、而かも其眞理は基礎的眞理なりとせば、之を求むる尙一層易きものあり、要は唯だ理性の用を失はざるに在り、我を以て此業の成功を疑はず、夫れ理性は凡ての人皆之を有す、我理性を以て得たる所、之を人の理性に訴へ、以て其賛同を得る、何の難きか之あらん。」

本城「然れども若し人も亦其理性を以て之を排斥するを如何。」

淺井「苟も知慮ある人にして我に賛同を表する者なしとするか。」

本城「多少は之あらん、而かも君と全く同意見を懐く者にあらざるべし、設合同意見を懐くとするも、豈夫れ永遠を期すべけんや。」

直江「人心の異なる猶其面の如し、昨日の友は今日の敵なりと、世間何ぞそれ斯の如き不吉の言あるや、蓋し亦是れ人事の歴史なるか。」

海野「然り、是れ實に吾人日々眼前に檢しつゝある歴史なり。」

本城「何れの代にか此歴史なからん、人間は古今同一、今代の歴史は則ち是れ昔時の歴史の反覆のみ、距今二千年前、有名なる羅馬の文豪シセロは、既に當時學界の狀態を描寫して曰く、

『眞理の地上に於ける果して如何ぞや、神に就ての眞理、人に就ての眞理、吾人の義務、運命等に就ての眞理は果して如何ぞや、(是れ實に吾人の所謂基礎的眞理なり)、是等は眞に皆風を捕へ雲を捉むと一般なりき、何となれを區々の議論百出し、片々たる意見紛起して、確立一定の説は一も之なく、常に學者二人の間に衝突せるのみならず、往々は自家同一の人に於て衝突ありしを免れざれをなり、甲論乙駁、昨是今非、日々千萬の假定説を空想し、千萬の異主義を案出しつゝ、天

下毫も確定せるものなしと云ふの外、他に確定せる事毫も之を後世に傳へざりしなり、其説の紛々藉々たる、其人の變幻定りなき、一驚を喫するの外なし、其説の人に依りて異なるは尙可、同一の人、時に依りて之を異にするに至つてや、無節操沒意見も亦太甚し、吾人は其説を目して架空の虚談と稱せざるを得ざるを悲むと同時に、轉た其人の憑據するに足らざるに失望するものなり。』(de Legibus Lib. I. 17.)

直江「嗚呼是れ實に奇々妙々、今日の知識界も亦此の如し、此句宛も昨日記したるが如き心地す。」

海野「シセロは何の點に就て此失望的言辭を并列したるや。」

本城「善惡正邪の區別に就き、當代學者の論議の區々相合はざりしを號かんが爲に。」直江「之を今日の學者に問ふも、亦正に此の如くなるべし。」

淺井「萬事を賭して一日も早く、此病に藥を投せざるべからず。」

本城「請ふ君、僕をして尙シセロの語句を繼ぎ語らしめよ。」

『然れども學者の看取したる自然的真理なるものなきにしもわらざりき、但た之を確定するを得ざりしを如何せん、是れ將た何を以て然る耶、他莫し、當時學者の間に『一致』なかりしによるなり、各自其意見を吐き、其門を別にし、以て其講坐の上より氣隨氣儘の教を垂れたり、其標準とする所は往々唯だ是れ『自己』、即ち自ら高く標置して以て、故さら人にも異ならんことをのみ是れ努めたるなり。』

直江「嗚呼是れ實に古今東西の通弊、主義黨派の吾人を隔立乖離せしむる原因全く茲に在り、『自ら高く標置して以て異を他人に求む』とは、萬古味ふべきの語なり。」

本城「翁請ふ余をしてシセロの語を終らしめよ、

『借問す、此一致の缺乏せるは果して何の爲ぞ、曰く權利の缺乏せるが爲なり、既に權利なし、曷ぞ人に向つては、爾我ど見を同うせよと云ひ、己れ自らに向つては、我今日も亦昨日の見を持せんと云ふ必要あらんや。』

直江「然らむ何爲ぞ法省を立て、學界を支配し、其意見を一定せしめざりしや。」

本城「翁は世の裁判省に就て語るか、請ふ此點に就ても亦シセロの言論を聞かん、翁

少しく煩勞を忍むれよ、余は茲に其言を終結するの意なり、シセロは嘗て道德目的論に就き、三個の偉人を引いて相對談せしめて曰く、

『マルクス「此問題や學者の間に大に議論のある所、然れども之が裁斷は請ふ異日に譲らん。」……アッチクス「誰か之を裁斷する者ぞ、セルリウスは既に死せるにわらずや。」……クイントス「セルリウスの死何ぞ此問題に關せん。」……アッチクス

「然れども我嘗て之を聞く、曰く、君の友セルリウスの希臘に領事たるや、在雅典の哲學者を悉く招致し、日を期して其議論終局の策を呈して曰く、卿等若し死する迄も勝たんとするの氣なくんぞ、事或は圓滿を見るを得べし、然れども卿等に於て若し和を結ぶに意あらむ、不肖之が仲裁の局に當らん云々と。」……マルクス「事頗る奇、古來屢々此の如き笑柄あり。』

領事にして哲學者の議論に干涉し、法廷の權を以て眞理探究の言論を裁判せんと欲するが如きは、實に奇怪千萬、天下後世の傳へて以て笑柄とすべきは勿論なり、故にシセロはマルクスの口を假りて『事頗る奇、古來屢々此の如き笑柄あり』と嘲笑せり、

要するに眞理の化身にして自身不可誤の特權あるを確保する者にわらずんぞ、決して斯の如き仲裁を爲す能はざらんなり。」

直江「眞理の權化云々は、是れ夢想のみ。」

本城「故を以て古人も亦斯る折衷主義の議論と官權の之に對する干涉とを嘲笑したるものなり、古より折衷主義の企業に従事したる者は、誰も其目的を達したる者なし、單に知識界を混亂して、疑問難題のみを増殖したるに過ぎざるなり、多くとも折衷主義と云ふ一の薄弱なる主義を世に遺したるのみ、余は薄弱と云ふ、何となれを多くは皆是れ窃偷主義にして、自家固有の特性毫も之なけれをなり。」

淺井「君は我主義の諂諛者にもわらざれを、獎勵者にもわらず、極めて冷たき反對者なり、然れども僕は君が胸襟に城壁を措かずして、所信を眞率に吐露したるを多謝せずんをわらず。」

本城「僕性は本城、名は篤信、曷ど本來の所信を篤實に開陳せざらんや、名は實の實なりと云ふ、僕不肖と雖所信を隱蔽するが如き曲事は知らざるなり。」

浅井「如何さま君は昔片氣の人なり、君の一語一黙、一舉一動皆古臭し、現に今の一言を聞ても君の現世紀的人にあらざるを知る。」

本城「然り、僕は眞理と共に古し、現世紀的の片々才子は僕の嘔吐する所なり。」

直江「愚老を以て今日の哲學者を見れど、無用の事に過分の勞を執りつゝあるが如し。」

浅井「其故何ぞや。」

直江「愚老は古來相反する哲學主義を包含せんとするの理由を見ざれをなり。」

浅井「吾人の所謂折衷主義なるものは、包含するにあらず、撰擇するにあり。」

直江「撰擇と云ひ、包含と云ひ、文字上の議論のみ、愚老の言はんと欲する所は他に在り、設令東西各種の哲學主義を撰擇して以て一の折衷主義を組織せんと欲するも、是が爲には彼此相反せる異主義を和合せしめざれを、決して其目的を達する能はずと云ふに在り、愚老は哲學を學びたることなれを、此點に就ては固より素人の素人たるを免れざれども、古今東西の異主義を和合せしむるが如き事は、極めて困難ならんと思考す、何となれを是等異主義の主唱者は、皆各々其原義を異にせる者なるを以て、其

結論に至ても亦皆各々相異なるものなれをなり、異なる原義より出發せを、異なる結論に到達するは、是れ自然の論理なり、而して今日の折衷論者は是等の事を是れ顧みずして、古今東西の哲學主義を參酌鎔鑄せを、一の完全なる新主義を組成するを得と空想す、是れ愚老の所謂無用の事に過分の勞を執れる者と思考する所以なり。」

本城「此の如くせずんを、折衷主義は産る可きものにあらず。」

直江「勿論博識の先生方に取りては、此事温古知新の一端ともなるべけれを、自身一個の慰藉として興味ある事業には相違なかるべけれども、一方より觀れを、是れ單だ古今の奇論を發見し、東西の珍説を拾收する閑散事業に過ぎざれを、此を以て日本國民の哲學上の希望を満すことは能はざるものなり、試に想へ、プラトンが斯々の時代に斯く語れりと云ひ、カントが斯々の書中に爾く論せりと云ふも、日本國民に取りて何かあらん、國民の屬望する所は決して茲にあらざるなり。」

浅井「如何さま帝國大學創立以來、舉國之に一大希望を屬して、帝國の極端まで照破する一大燈明の出でんことを待ちつゝあるもの、如し。」

本城「何ぞや、其所謂舉國の帝國大學に待ちつゝある一大燈明とは。」

直江「民には辨なけれむ、其思想其希望を言顯す能はず、愚老代つて之を語らん、民は帝國大學に待つに、其一日も早く社會の道德を維持し、國家の隆運を増進する一大基礎的哲理主義を發見して、之を舉國具瞻の一大燈明となさんこと是なり、何となれむ社會の道德と國家の隆運とは兩々相待て須臾も相離る可からざる事は、今や舉國の民皆之を檢知すれむなり、是故に物質論者も之を筆にし、拜金論者も之を口にし、今日の新聞雜誌亦皆此精神的飢渴を表明せざるはなし、嗚呼一時物質主義に欺かれ、現金主義に迷はされたる者、今や其惡結果の日々社會に顯はるゝを見て、漸く將に其必須の大真理に注目するに至れるは、遲蒔ながら國家の爲に慶賀すべきなり。」

淺井「翁の見に據らむ、其所謂必須の大真理とは何ぞや、今日の大學校は年一年に其課目を増加し、今や殆ど諸事完成せるが如し、然れども尙且民の希望を満たさずと云ふか。」

直江「愚老は課目杯の事は知らず、唯だ其社會に顯はるゝ結果を見て之を論ずるのみ。」

淺井「社會の何處に其結果を見るや。」

直江「法廷と警察と監獄に於て之を見る、此三ヶ所を繁昌せしむる人々の員數性情を仔細に檢するときは、今日の大學校は如何に進歩せりと雖、愚老は尙未だ其必要缺く可からざる元素を缺けるを認む。」

淺井「何ぞや其必要缺く可からざる元素とは。」

直江「人を道德幸福の域に導く一定不變の原義を謂ふ、世に此の如き原義ありて、之を明瞭的確に證明するときは、人は合理的なるを以て、自然其結論を實行の上に現出するに至るものなり、勿論四千餘萬の人民の中には、自家固有の正理に背いて、此原義の反對に出る者なきにしもあらざる可けれども、斯る場合にも民の多數は必ず大學校の教ふる所を行ふて、其道德的原義の結果を實行の上に現はすべき事、日常の經驗明に之を證す。」

海野「吾人は又々同一の問題に落ちたり、先きの所謂基礎的真理と、今の道德的原義

とは、語異にして義同じからずや。」

直江「先きには問題を提出して之を論議したり、今は則ち之が答案を求むるものなり、蓋し我等老人は諸君の如き理論的人士と異なりて、全く實行的臣民たるに過ぎざるを以て、議論の一事にのみ日を費す能はず、否議論する時をも有せず、必要とする所は單だ其結論のみ、今日の學問が斯々の理論に基き、云々の經驗に據りて、斯々云々の議論を爲しつゝありと云ふが如きは、我等實行的臣民の毫も關する所にあらず、我等は唯だ其學問の決定したる結論、即ち明瞭精確に證明したる道德的原義所謂行爲の標本なるものを要求するものなり、設令愚老は寸分違はず其標本の如く實行すべしと斷言する能はざるも。」

本城「知ると行ふとの間には大なる區別あるものなり。」

眞江「自ら行ふと人に行はしむるとの間には於ても亦然り、故に愚老は先づ諸君に要求するに、一定不變の道德主義を知らしめよと云ふ、知りたる上は愚老自ら之を守り、又及ぶ可き丈け之を人にも守らしめんと欲す。」

淺井「基礎的眞理と云ひ、道德的原義と云ひ、又は單に道德主義と云ふ、用語頗る煩なり、之を要せむ、如何なる主義を謂ふや、替言せむ、我哲學に向つて如何なる問題を決定せよと要求するや。」

直江「談多岐に涉るを以て、用語も勢ひ一定する能はず、愚老は哲學的の用語には極めて拙なるを以て、自然の言辭を以て語らんと欲す、要するに愚老が素人ながら何的眞理、何的原義杯と今人の口吻に模擬して論じ來りたるものも、之を眞摯直截の語に改むれむ、他なし、人長じて其知識發開するに當り、忽ち吾身に省みて、我は如何なる者ぞ、何處より來れる者ぞ、又何處に歸すべき者ぞと自問自答しつゝ、ある主要の問題を謂ふなり、去れむ之を人生問題とも云ふべく、本末問題とも云ふべく、又人生終焉の目的問題杯とも稱するを得べし。」

本城「如何にも『何事に於ても其終末を考へよ』(In omnibus respice finem)と云ふ事は、人生第一着に知悉すべき問題なり、我は如何なる目的を以て此世に生れ出でたるやを知らざるときは、如何に行動すべきやを知る能はず、翁が曩に『行爲の標本』と稱し

たるもの、我茲に於てか見る。」

海野「然り、自己の本末を知らざる者は、無知の動物と同じく、此世に偶生偶行する者なり、其歩するや行く處を知らず、唯だ足に任せて、其食すべき處、飲むべき處、金儲けすべき處、樂むべき處に就くのみ、盲者の旅行とは是れ之を謂ふなり。」

直江「然れども吾人に辿るべき道を教へて、吾人の歩を規畫すべき者は諸君にあらざるや、諸君は吾人運命の指南車なり、吾人は單だ之に隨行して歩すべき者のみ、歩すべき道を教へよ、歩すべき道を教へよ、之を知らざれを人生の盲旅行なり、世には目的の地に到らんと欲して、其方向如何を顧みざる者はなし、あらむ狂なり、然れども世間には何ぞ此種の狂者の多きや。」

本城「吾人は如何なる者ぞ、如何なる處に歸着すべき者ぞ杯の問題は、之を提出するは易く、之を説明するは難し。」

直江「然れども明確に之を説明せざる時は、暗夜に光なきと一般、我は歩を就くべき處を知る能はず、我既に知る能はず、焉ぞ人に知らしむるを得んや、因て以爲らく、渾て

の道德、渾ての政治は約して二語に歸すと、曰く人は如何なる者ぞ、隨て如何にして自他を治むべき者ぞと云ふ事はなり。」

海野「翁は此點に就き、説明を哲學に請はんとす、哲學若し靈あらむ、以て己の一大面目となすべし、何ぞ其れ之に期待するの大なるや。」

本城「斯る重要問題なりとせむ、今日の哲學者が東探西搜して以て世界の知門を叩かんとするも、毫も奇しむべき所なし、然れども斯る事業に日を費しては、終焉翁を満足せしむる答案は出でざるべし。」

直江「愚老の得て解する能はざる所正しく此事なり、愚老の要求する所は、學問進歩の極點にはあらず、勿論重要は重要なるに相違なれども、謂はゞ是れ哲學の初歩なり、何となれを愚老の知らんと欲する問題は遠きにあらず、近き『我』にあるなり、世界の哲學主義を研究するも研究せざるも、愚老に於ては毫も其冷熱を感せず、愚老は單だ『我』のみを知れむ可なり。」

淺井「『我を知る事』易きが如くして易からず、之を知らざる者余のみにあらず、古來の

哲學者亦之を知らず、蓋し此點に就ては議論紛々として未だ確立一定の説なし、蓋し之を確立一定するの權利ある者、哲學者中一人も之なかるべし。」

直江「是れ即ち愚老が先刻對談の中に、諸君等今日の哲學者は、折衷主義杯と云ひて、無用の事業に過分の勞を執りつゝありと語りたる所以なり、古今東西の哲學主義を參酌すれを以て、果して何の益ぞ、要する所各自の主義相合せすと云ふことを實驗するまじり、益ありとせむ、唯だ其實験のみ、故に彼等哲學者は何を語りたるも又何を語りつゝあるも、遺棄して之を顧慮する勿れ、彼等の議論は如何に紛々藉々たりしも、事の真相に對しては寸毫も損益なし、我は依然我たり、我に若し一の肉身一の靈魂ありとせむ、彼等如何に之を拒否せんと欲するも、得ず、若し亦我には一の肉体あるのみにて、全く物的たるに過ぎずとせむ、彼等如何に之に反對するも、我は爲に一の靈魂を有するに至らざるなり、議論は議論、實際は實際、始より確固動すべからず。」

本城「彼人金ありと言ふも、其人爲に富者となるを得ず、此人知ありと言ふも、其人爲に賢者となるを得ず、富者も賢者も人言之を爲すにあらざれむなり。」

直江「若し人言人を富ましめ、人を賢ならしむるとせむ、富者となり賢者となるは極めて易からん、……夫れ然り、故を以て我は我たり、古來の哲學者何を語るも、我は我たり、其議論は我の我たるを毫も損益せしめず、我の我たるは其議論の上に超越して、獨立不羈の生を送るものなり、既に彼等哲學者我に用なし、故に我は之に訣別の辭を告げて、直接君に問はんとす、曰く、我は如何なる者ぞ、願くは君の哲學を以て、愚老の爲に之が説明の勞を取られよ、問若し剩りに卒爾なりとせむ、穩和の言を以て之を問はん、曰く、君の見に據らむ、君の見とは君の創見を謂ふなり、君の日々吐露しつゝある主義を謂ふなり、其創見主義に據らむ、人とは果して如何の者ぞ、君は其れ如何なる定説を之に下さんと欲するや、『合理的動物』の語は陳腐なり、愚老は一層明確なる定説を聞かんと欲す、世界各国の言語に於ても、日本語に於ても、人間成立の要素を指すに二語あり、此二語は愚夫愚婦も亦之を知る、而かも明に二個の劃然區別ある者を示すものなり、他莫し、肉身と靈魂の語是なり、高尚に之を言へむ、人體と精神とも稱するが如し、君の高見を以てせむ、否寧ろ君の日々吐露しつゝある主義を以て

せむ、此二語善く其實物に適合するや、將又人の靈魂肉身と稱するものは、單だ其文字上の區別のみなるや、切言せむ、果して肉身と其性を異にする無形不滅の靈魂なるもの實在すとすや否や。」

淺井「少くとも此二語に適應する思想の區別あるは瞭なり、我れ靈魂と言ふときは、人皆明に其肉身と相異なるものたるを識認すれむなり、故に思想上二個全く別物なりと謂ふ可し。」

海野「靈魂と言ふときは、生命、運動、感覺、知識等の本源を表明するや必せり、其本源の性質如何に至ては兎も角も。」

直江「此本源は肉身中に在るや否や、肉身より出で來るや否や、替言せむ、生命、運動、感覺、知識等は物體の性情特質なるや否や。」

淺井「先づ第一土石鑛物の如き無機物に於て斯る性情特質の之なきは明白なり、草木、禽獸、人間等の有機物に於ては如何と云ふに、吾人は其之あるを認む、何となれむ是等の物は皆生命、運動、感覺、知識等所謂活動運用に必要な機關を備具すれむなり、勿論

物によりて、機關の完不完はあれども。」

直江「動作運用は無論機關なくんむ行はるゝものにわらず、目なくんむ見る能はず、耳なくんむ聞く能はず、足なくんむ歩する能はず、肺なくんむ呼吸する能はず、腦なくんむ思考する能はず、然れども敢て問ふ、生命、運動、感覺、知識等は單に機關の働のみに過ぎざるか。」

本城「人は常に常識と經驗とに據りて、機關は生動するが爲に必要なりと稱す、例へば筆墨は書く爲に必要なりと云ふが如し、然れども機關其物を以て生動の原因本源と爲す者は未だ曾て之あらず、蓋し普通の常識に背反すれむなり、之を試験するは極めて易し、今日生物は何處より始まりて、如何に生長するかは、人皆之を知る、最初は至微極小の物なれども、漸次生長するに従つて、形態を成し、容貌を現はしつゝ、物の種類により、順序によりて、終に機關を備具する一定の形体を成すに至るものなり、然れども今仔細に是等の順序を檢するに、生命は機關より發生するにあらずして、却て機關が生命より組成せらるゝを見るなり、何となれむ初め彼の至微極小の一物中に、生

命と云ふ不可思議の力なくんば、彼は永遠至微極小の一物体に繼續して、到底生育して以て一の生物となるに至らざるべけれをなり。」

浅井「然れども今化學的作用によりて、有機物を解剖し、分解法を以て之を分析するに、終には各々其元素に復歸して、毫末も無機物の物体に異ならざるものとなるなり、乃ち知る、有機物と雖、之を元素に復歸して考ふるときは、亦是れ無機物と同性同質のものたるを、二者の相異なる所は唯だ其元素化合の方道如何に在るのみ。」

海野「如何さま有機物より生命の飛び去りたるときは、其物自ら解體して個々別々の分子となり、其分子又各々其元素の古態舊狀に復歸す、而して今其状態を檢するに、全く無機物の状態に異ならず。」

浅井「此等の實驗に據りて觀るときは、人靈の性質、所謂生命の本源なりと稱する靈魂の性質に就ては、古來如何なる説ありとするも、生動知覺する有機物体の中には、必ずや一種の力、少くとも無機物体に發現せざる一種の力の發現之ありと謂はざるを得ず。」

直江「生物就中思考する人間に在りては、無機物体に發現せざる一種の力の發現しつゝある事は、確乎として疑ふ可からず、然れども愚老は一步を進めて問はんとす、其所謂一種の力なるものは何ぞや。」

浅井「此點に就ては諸説紛々として、千萬の見解、千萬の説明之あるを以て、余は容易に之が答を爲す能はず、余は此問に際する毎に、昔者シラクサスの王の前に出でたる哲學者と同一の感あり、王之に問ふて曰く、神の性質如何、哲學者王に一日の猶豫を請ふ、翌日王の前に咫尺して其答の發見せざるを謝し、重ねて又一週の猶豫を願ふ、一週日の後再び王の尊前に出で、又々其答の發見せざるを謝して、一年の猶豫を乞ひたり、猶豫猶豫又猶豫、彼は遂に其答案を發見せざるうちに死去したりと云爾、翁今余に問ふに靈魂の性質を以てす、哲學者と同一の悲運に遭遇したるを悲ますんをわらず。」

直江「愚老は君に機密の説明を請はんと欲するにあらず、生命の本源の吾人に知れざることば、愚老も亦之を知る、吾人は一の生物を取り、分解法を以て之を分拆せんと欲するも、其生源所謂吾人の常稱する靈魂なるものは、必ず吾人の試験を脱して、物

体の原子アトムと同じく檢することを得ず、今日小學校の生徒と雖、物体解體するも、其元素は一個も消盡するものにあらず、皆無盡性を備ふるものなるを知るなり、然るに靈魂のみに至つては如何ともする能はず、名醫が圭刀を揮ふも、得て之を檢する能はず、然れども吾人の生育し、行動し、思考しつゝあることは、疑ふべからざる事實なりとす、シラッザスの王は哲學者に頼りて満足を得ざりしかども、愚老は君に依りて満足を得んことを希望するものなり。」

淺井「余は翁の深意を知る能はず。」

直江「他莫し、愚老は、生命、運動、思想に就き、君より之が満足の解説を聞かずんを、決して君の死を容さざる意なり、敢て問ふ、君は生命、運動、思想等を以て全く物体の特質なりとするや否や、視よ先づ我肉體を、愚老は其如何なる元素を以て組成せらるゝやを明に知悉す、水素、窒素、酸素、炭素等所謂十四元素を以てするにあらずや、我肉體を組成する前には、其無機物にして生命もなく、運動もなく、知識もなきものたるや言ふを待たず、而して其一たび我肉體組織の分子たるを失ふに當つては、各

々其元素の舊狀古態に復歸することも我亦之を知る、唯だ問ふ、我の生き、我の語り、我の思考しつゝある時には、果して如何ぞや、我生命、我言語、我思考等は果して現在我肉體を組織しつゝある物体の作用なるや否や。」

淺井「否、現在翁の肉體を組織しつゝある物体は、若し其先きに有機の生物ありて、之を同化するにあらずんを、決して生動するものにあらざるなり。」

直江「然らば其所謂有機の生物は、其生命を何處より得たるや。」

淺井「他の之に類せる有機の生物より之を得て、轉々亦之を他の物体に傳ふるものなり、蓋し生命は生物より出づる活ける細胞を以て傳はるものとす。」

直江「此の如きは單に疑問を輪廻せしむるのみ、若し果して我肉体に生命を與へたる物体が、我肉体に相類するものなりとせむ、其我が具有する生命、運動、理性、良心等を具有し居たるや明なり、果して然りとせむ、愚老は又々同一の問題を引て言はんとす、其所謂具有し居たる生命、運動、理性、良心等も亦是れ物体の作用なりしや。」

淺井「近代の科學を以て言はゞ、然り否と且然諾し且否定せざるを得ず。」

本城「若しアリストテレスをして君の言を聞かしめむ、太く之が不合理の理に腦を苦むるならん、同一の事物にして果して然り然らずとするを得るや。」

浅井「請ふ仔細に之を解説せん、若し世間普通の意義を以て之を言はば、生命、運動、知覺等は物体の作用と謂ふ能はざるや必せり、何となれを物体とし云へむ、世人は全く之を無知無覺のものと見做せむなり、然りと雖、今之を多くの學者の說に據りて考ふるに、物体の中には一種の潜勢力伏在すと云ふ、此潜勢力は幾代の間も潜伏の状態に繼續し得ること、猶ほ彼の電氣が發電の原因に誘起せらるゝまで、金屬の中に永く潜伏するが如し、然れども其一たび之を誘起する導体に接するときは、忽ち發現して生命の不可思議なる現象を顯はすと云ふ、即ち下草木の生命より、上知覺良能の生命に至るまで、皆此潜勢力の顯象に外ならざる由。」

本城「君は昔人と同じ信仰を有するものなり、昔人嘗て以爲らく、天地萬物の中には一大靈魂なるもの遍在す、之を世界の大靈と云ふと、君は世界の大靈の代りに、一種の潜勢力として、物體の中に伏在すと信ず、何ぞ其說の古今相似たるや、異なる所は

唯其名稱のみ、古は世界は一大動物の如きものにして、一の靈魂其中に在りて上下四邊を自由自在に活動せしむと云へり、今は世界に靈魂なるものなし、物體自ら一種の力を潜め、時機ありて醒起し、出現し、發達し、完備したる上、知覺し、運動し、思考し、論議し、行動して以て、其爲す所に責任を帯び、善惡によりて喜憂を感じ、功罪によりて賞罰を待つに至ると云ふ、而して此等の事は皆物體中に伏在する潜勢力の發現に外ならずとは、即是れ今日の學問の進歩したる言論なりとす、嗚呼亦大なる哉。」

直江「君は凡百の結論を一時に釣出したり、大早計の譏を免る能はず、世界の大靈云々の説は、詩人的の觀念より出でたるものと知らずや、錦心繡腸の文客の如きも、魏然天を磨するの山、幽邃晝尙暗き林、透徹鏡の如き清泉、浩浩湯々として流れて盡きざる長川等に就て、或は婉轉愛すべく、或は悚然恐るべき山川の神を觀想するを以て、極めて雅致ある觀念なりとす、古人は往々皆此の如き觀念を以て、森羅萬象を觀察したるが故に、凡そ天地間に散在する事々物々、皆之を愛すべく恐るべき善神惡神の有に歸せざるはなし、而して道德も亦茲に其支柱を得るに至れり、例へば母が乳兒の惡を

誠むるに、山神龍蛇の來るを以てするが如き類是なり、勿論後日兒の生長したる曉に至りては、是等の怪事を信仰するものはなければ、幼時の正直なる良心は永く繼承して、一惡一罪を犯す毎に、必ず神譴冥罰を聯想せざるはなし。」

淺井「古來人民を愚にして、其心を理由なき迷信恐怖の宿所となしたるものは、全く是等の空想、是等の風習に原因せずんをわらず、民にして一たび茲に浸染するときは、忽ち怯となり、懦となりて、山河木石何物か之を畏怖尊拜せざらん。」

海野「月日星辰に至りては最も然りとなす。」

淺井「斯の如き想像は詩人に取り、文士に取りて如何に雅趣あり、如何に興味ありとするも、想像は理論にあらず、詩歌は科學にあらざることを記せざる可らず、今日の所謂合理的科學は想像詩歌等の説を遺棄して顧みず、彼は右手に鐵槌を携へ、左手に燈火を掲げて以て百物萬事を研鑽しつゝあり、今や其研鑽に依りて、泰山の絶頂に在るものは何、蒼海の極底にあるものは何と、明に之を知悉するを得たり、豈管山海のみならんや、一蹴高天の上に至り、彼の皎々たる日や月や星や果して如何なる元素を

以て組成せるやと云ふ事までも尋究して遺すなし、然るに何處を探ぬるも、所謂靈性なるものは何處にもなし、天界にも之なく、地界にも之なく、人間界にも亦之なし、有る所のものは何ぞ、曰く唯だ物体のみ、物体なる哉、物体なる哉、到る處皆物体のみ、乃ち知る、大古の世界の大靈説は全く詩歌想像的の空説にして、今日の唯物主義のみ合理的、科學的の實説なるを。」

本城「大なる哉君の所謂合理的科學的實説や、然れども僕に一言を挾ましめよ、此は是れ化學者に取りては異とするに足らざれども、哲學者に取りては頗る驚くべき説にあらずや。」

海野「然り、今日の化學者は日々分解組成の學に従事して、分子間の親和力結合力等のみを研究するを以て、是が爲め遂に物体の外に靈物の在ることを忘るゝに至りたるは、毫も怪しむに足らざれども、哲學者にして此説を讀し、生命、思想、自由等の顯象を以て、骨髄と同質なる腦蓋の結果なり杯と云ふが如きことを唱ふるに至つてや、頗る奇と謂ふべきなり、唯々然り、生命、思想、自由等を以て、熱、光及び電氣等の作

用によりて離合する分子間の引力と同一視するが如きは、化學者の議論としては恕すべく、哲學者の議論としては恕す可からず。」

淺井「哲學は決して人の思想意志等を以て斯の如く粗鈍のものとは爲さず。」

海野「僕は粗鈍と言はず、同質と言ふのみ、故に僕の言は其正を失はず、試に腦蓋と骨格とを檢せよ、其内外の質何れも同一なるにあらずや、唯だ其異なりとする所は、腦髓の動くや、骨身の熱、光、電氣の作用によりて伸縮遊離するが如くならずして、思想希望、意志等の高尚なる結果を呈するものなりと云ふ事はなり、然らむ即ち今日の所謂唯物主義に據るときは、腦髓の働なるものは、骨身の動搖と毫も異ならざるなり、而して今之を分解法に懸けて見るも、兩者の中に在るものは硫黄、磷、炭素等全く同一のものなるを認む。」

淺井「然れども一は有機物にして、一は無機物たるを奈何せん。」

海野「有機無機何ぞ關せん、況んや其有機物となるや、單に分子間の力に依ると云ふに於てをや、凡て分子間の力に依りて出づるものは、其結果の高下如何に係らず、全

く物質的結果に外ならざるなり、唯だ其物體の未だ有機とならざるや、熱、光、電氣等のものを分離せしめ、其一たび有機となるや、思想、希望、意志等をも分離せしむるに至る、然れども兩者の間には始より物體の作用あるのみ、豈他あらんや。」

直江「愚老は今二君の議論を側聽して、忽ち鷺鳥の羽翼を切斷せられたるが如き感なくんむあらず、愚老敢て自らを以て空天に翔翔する鷺鳥に擬するにはあらざれども、今の議論に接して忽ち力を失ひ、宛も鷺鳥の翼を失ひたるが如く、直に空中より墜下して、大に負傷したるが如き心地するなり。」

淺井「翁も亦比興に巧なり、知らざりき此詩人的の言あらんとは。」

直江「愚老は未だ嘗て詩歌の如き藝園を耕作したることなし、愚老の從事せる政治學の如きは人間の心配學にして、詩歌的理想とは大に異なり、然れども愚老豈亦一の靈性あるを信せざらんや、今日まで愚老は心、知識、理性の如き、吾人の依て以て萬物の上に卓越せりと思へる能力を備具したるを見て、竊に天に向つて之を謝したりき、今日まで人間のみは知能を以て空前絶後の大發明を爲し、道德を以て翻天掀地の大偉

業を企つを得るを見て、心竊に自負したりき、然るに今や二君の議論によりて、是等の事皆物質的作用結果たるに過ぎずと聞くや、忽ち失望落膽の淵に墜下して、自ら慰藉する能はざるに至れり、嗚呼高尚なる人間、唯是れ一の物體たるに過ぎざりしか、萬物の靈長と信じたる者は、南柯の一夢に外ならざりしか。」

淺井「余も亦翁と悲歎と同うす、然れども此事たるや實驗上争ふ可からざる事實なれを止むなし、今日の科學は、天地間物體を除いて更に物なし、人間の如きも亦是れ一の物體に過ぎずと斷定するを奈何せん。」

直江「然れども今日の科學は其斷言を確定するが爲には、吾人に向つて一の證明を與へざるべからず。」

淺井「如何なる證明ぞ。」

直江「一の實例にて可なり、即ち若し果して生物も人間も物體の結果に外ならずとせば、此事を吾人に證明するが爲に、其物體の始めて生じ、始めて動き、就中始めて思考するに至りたる時の實例を示せよ、若又其物體は他に既に生動せる物體より、其生

命、運動、思考等を傳承したりとせば、其傳承したる時の實例を吾人に示せよ、斯る實例あらざれば、愚老忽ち物皆物體、我も亦是れ一の物體たるに過ぎざるを信せんとするものなり。」

淺井「翁は不能の事を要求する者なり。」

直江「何ぞ不能の事と謂はん、我今現に生動して諸君と語りつゝあるを以て、我身に生命思考等の物體的作用あるや明なり、果して然りとせば、何故同一の作用の或は自ら起り、或は他より起ざるを實驗し得られざるの理あらんや、愚老は乃ち其實験を要求するのみ。」

淺井「然れども萬物の法則は之が實驗に反せり。」

本城「善い哉言や、夫れ萬物の法則に據りて、君の言の如く、此不可思議なる作用日々吾人の眼前に行はるれども、其行はるゝや一の生命ある種子に依るを記せざるべからず、而して其生命なる種子は他の同種類の物より出で来る事、是亦吾人の日々目撃する所なり、蓋し生命は種子の中に潜伏し、頑冥なる物體物塊を取りて以て之を材料と

なし、豫め確然一定したる圖面に従つて一の築造物を作り、之に特殊の形容を附して以て始めて有機物を構造形成するに至るものなり、此構造は物體が生命に支持せらるる間依然繼續すれども、一たび其生命の物塊を去るや、忽ち崩壊して亦初めの物塊に歸し、他の生命來りて之を使用するまでは、頑然として形體もなく覺識もなく遺存するものなり。」

海野「是亦吾人の日々實驗する所、其事剩りに日常普通なるを以て、吾人は之を思にも浮べず。」

直江「吾人各々其身に省ても亦明に之を知るを得、何となれん年齢若くは他の原因によりて、吾人の身體は或は生長し、或は老衰しつゝ、われをなり、是れ蓋し物體の分量の増減するに由て然るならん、然りと雖斯の如き一盛一衰の中に在りて、秋毫も之に感觸せざる者あり、何ぞや、『我』なる者即是なり、『我』なる者は、超然として身體感衰の潮流の外に立ち、幼年に在りても、老年に至りても、始終依然たり、十歳の『我』は六十歳の『我』と毫も其異なる所なし、但だ年老ふるときは、眼暗み脚曲り、臍頑くな

りて、是等の機關を運用するに一層の困難を感ずるに至るのみ、然れども是等は皆機關の改變にして、『我』なる者の改變にあらず、世に『我れ考ふ』と云ひ、『我れ衰ふ』と云ふと雖、我機關の老衰するものにして、眞誠なる『我』なる者の老衰するにあらざるなり、我と我機關との間には大なる區別あり、之を知らんと欲せむ、老人に就て之を視よ、其機關所謂支體なるものは衰へて用に堪るざるに至るも、其所謂『我』なる者は依然として存し、自らは其支體の衰へたるを歎じつゝあるなり。」

海野「翁の言を聞き、余は忽ち古賢の言を想起す、曰く『我豈皆死せんや』(Non omnis moriar)、我の何物かは死せん、然れども我の我たる者は死するものにあらず、所謂我の附屬物は改變すと雖、我の主となれる者は初より依然たるの意ならん、翁の言説を得て明快なり。」

淺井「翁と君との對談は頗る辨學的なり、辨學は僕の得意とする所にあらず、僕は唯物論者なり、而して唯物論は辨學の友にはあらざるなり。」

本城「豈管辨學のみと言はんや、言語に取りても、唯物論は其大敵なり。」

浅井「开は又何の謂ぞや。」

本城「君試に唯物主義によりて言語を活用し視よ、蓋し思半に過ぎん、例へん兒童に物を教ふると云ふ事は、君の唯物主義によりて何と言ふべきや、我れ之に教ふとは云はれざるべし、我れ其頭腦の分子を動かすと云はざるべからざらん、君若し其誤を咎めせ、兒童は答て曰はん、我腦髓の化合甘く行はれざりきと、君若し之に事を命せんと欲せば、彼亦答て曰はん、暫く待たれよ、我を動かす力未だ發現せざれを云々と、君設ひ之を罰せんとするも、彼は毫も之を解する能はざるべし、何となれを惡とは何ぞ、道に背くとは何ぞと云ふを解する能はざれをなり、解せを唯だ是れ其思考しつゝある原子アトムが方向を誤りたるものと思はん、去れを之に對して怒るも無用なり、怒ると云はれざるべし、遠心力の過激なる爲め破裂を來したりと云ふべきのみ、隨て事皆此の如く、彼が其父母を愛せざるは、是れ唯だ彼が此點に引力を有せざるに由るなり、是を以て君若し兒童の過を改めしめんとするには、其腦髓の組織を根本より改革して、全く新なる作用、新なる顯象を呈するやう化合せしめざるべからざらん、唯物主義の言語を破却

するそれ實に此の如し。」

浅井「君の言は剩りに矯激なり、人誰か此の如き極端の言を爲す者あらん。」

本城「然り、誰も此の如く極端の言を爲す者あらす、君其理由を知れるや、是れ蓋し世には全然唯物主義の國民なるものなく、隨て全然唯物主義の言語なるものもなきが爲なり、僕の今語れるが如き言を爲す者あらむ、世の物笑となるや必せり、是を以て彼等唯物論者と雖、其語るや、必ず世人の常用する言語を用ふるなり、否らずんを獨語獨解、世人に解せられざるべけれをなり、隨て彼等の主義によりては、眞、善、美、正、直、義、信、榮譽、理想、自由等の如き至高至聖の言語は、毫も其意なきに至ると雖何となれを是等の語は彼等の爲には物體の化合、作用、運動、分泌、遊離等に過ぎざれをなり、然れども彼等は世人と同じく是等の言語を日常使用するを止めざるは何ぞや、他なし、斯る最高最聖の言語を巧に利用して以て、我思慮の醜惡粗笨を覆はんが爲なり。」

浅井「吾人は今日習慣と止むを得ざる理由とによりて、一時斯の如き言語を使用すと

雖、科學進歩するに至らむ、言語も亦改變するに至るや必せり、言語なるものは畢竟思想の被服に過ぎざれむ、歲月の推移によりて變り、事局の改變によりて變り、斯の如く歩一步づ、進んで早晚唯物哲學に適合する言語を來たし、遂には物質主義、實利主義等の文學辨學をも産出するに至るべし、今の場合には其言未だ世人の通語とならず、是即ち世人常用の言語を使用せざる可からざるの止むを得ざる所以なり、現に君の如きも亦此習慣先入の支配を免る能はざるにあらずや、君は醜惡と云ひ、粗笨と云ふと雖、哲學的に語れむ、實在のものには、醜惡粗笨と云ふことはなき筈なり。」

直江「有體に白狀せむ、愚老は今迄哲學に就て全く異様の意見を懷けり、以爲らく我邦の政治、道德等に萬古不朽の基礎を興ふるものは、必ず斯學ならんと、然るに今や事全く之に反して、我邦の政治道德を根本より破却せんとす。」

淺井「余の今語る哲學は決して我邦の政治道德を破却するものにあらず、單だ之を他の基礎の上に屹立せしめんとするのみ。」

直江「他の基礎とは何ぞや、吾人は今日まで政治の基礎は唯だ一、正義是なりと思へ

り、臣民の政府に服従する所以も亦是れ正義に在り、腕力の如きは、正義の觀念なき市井無頼の徒にのみ用ふる止むを得ざる手段なり、是れ吾人が政治の基礎に就き、從來抱懐し來れる意見なりとす、然るに君は今や異様の基礎を政治に與へんとするが如し、敢て問ふ、其所謂基礎は如何なるや。」

淺井「翁の今止むを得ざる手段と云はれたる腕力即是なり、唯物主義は之を除いて他に與ふべき基礎を知らず、物體なるものは力の外、他に良好の特性を有せざれむなり。」
本城「故に勢力は即是れ正義となるなり、宜なる哉『強者の權利』の語、今日此種論者の口より唱道せらるゝや。」

直江「此種論者の見に據れむ、臣民は其服従、尊敬の義務を誰に拂ふべきや。」

淺井「強者に拂ふべきなり、他に人なし、是れ論理なり。」

直江「嗚呼然るか、然らむ政治に就ては説を聞けり、道德に就ては如何、如何なる異様の基礎あるや。」

淺井「事皆論理的なり、自然の傾向は即是れ道德の基礎なり、自然の傾向の語、翁の

心に適せずとせむ、物體自然の發展と謂ふも可なり。」

直江「其發展に原則ありや。」

浅井「何を原則を言はん、但だ二力相共に戦ふときは、弱肉強食となるべきは自然の勢なり。」

直江「然らむ善惡に就て如何なる區別を立つべきや。」

浅井「善は天性の要求し、勢力の攫取し得たる所のもの即是なり、惡は則ち其反對を謂ふ。」

直江「天性の要求する所に種々あり、時には拮据相容れざるものを希望することもあり、此の如き異種反對の希望要求に就ては、毫も區別を置かざるや。」

浅井「善惡の點より觀察して、習慣と先入とは之が區別を立つれども、論理は之を立せず、物皆物體なり、物體を除いて更に物なしと云ふときは、天性の要求する所に惡なるものゝあるべき理なし、惡とは成功に反し若くは之を妨ぐるものを指して謂ふなり、例へば猶は彼の岩石を打つて自ら碎ける逆浪の如きものゝみ。」

本城「勇なる哉浅井君や、僕は君の如き人物を愛す、君は實に論理的の人間なり、一たび原義を提出したるときは、直前勇往、極端に至るまで其結論を釣出する者なり、其結論の奇々怪々となるも、敢て辟易逡巡するの容なき所、勇なりと謂ふべきなり。」

海野「然れども僕以爲らく、浅井君は自家の主義を主張する論法を以ても、自ら其主義を破却するものゝ如し。」

浅井「願くは其審なるを聞かん。」

海野「君は唯物主義を主張しながら、其頭腦の論理的なるは驚くの外なし、自らは物體の外更に物なしと云ふと雖、君の頭腦は決して化學的作用のみとは思はれず、必ずや物體に殊なる一種異様の元素あるや明なり、然らずんば何ぞ其れ斯の如く論理的なるを得んや。」

本城「是れ恐くは未だ發見せられざりし新元素ならんか、果して然りとせむ、化學は又更に一の新元素を加へたりと謂ふ可し、僕は浅井君に向つて切望す、其主張する化學を以て、先づ自家の頭腦を分拆し見んことを。」

直江「愚老も亦其分拆の席に列せんことを希望す、定めて奇なるべけれなり。」
 本城「然れども翁よ注意せられよ、分折の際腐敗せるガースの思想盆出して、其毒翁の身に及むんことを恐る。」

直江「君の言新井君に對して少しく敬禮を失へるが如し。」

本城「敬禮何ぞ我に關せん、我頭腦の作用之を爲す、我之を奈何ともする能はず。」

淺野「淺井君は極端なる哲學論者なるを以て、吾人は如何なる失言をなすも、氏は怒るが如き事はなかるべし、吾人が笑ふも罵るも、氏は是れ單だ腦の作用のみと看取すれなり。」

淺井「然り、僕は君等の嘲笑罵倒を毫も意に介せず。」

本城「此言既に充分其腦髓の地盤の確立せるを示すものなり。」

直江「新井君の腦髓は嘲笑罵倒をも許すとせむ、吾人の爲に大幸なり、然らむ愚老は遠慮なく尋問せん、蓋し愚老の氏に就て其説明を聞かんと欲するもの一にして足らざれなり、夫れ天地間物體の外更に物なし、吾人の性行も亦是れ物體の力の結果に外

ならずとせむ、大古より凡ての國民の間に行はれつゝある或る事跡、例へば德行に冠するに榮譽を以てし、罪逆に加ふるに耻辱を以てし、或は又法律を立て、不義を禁止、罰則を設けて惡事を懲す等の事は、果して如何に之を解釋せんと欲するや、若夫れ彼の良心なるものに至つては、冥々の間に懲戒を垂れ、半夜人なき時にも尙其惡を譴責し、如何なる議論を構造し、如何なる手段を案出するも、善に賞、惡に罰の應報なきを糊塗するを容さるゝにあらずや、淺井君、君は這般の顯象を果して如何に説明せんと欲するや。」

淺井「功名心の如き、法律の制定の如き、善惡の觀念の如き、要するに皆是れ吾人の心中に在る一種の力の進歩したる結果に外ならざるなり、其進歩は勿論一定の順序を経て來る、是等の事の初めて出現するや、時人は之を以て一の進歩となせり、然れども是れ唯だ一の驛路に達したるに外ならず、物變り星移ると同時に、進歩の旅は驛路より驛路に移りて須臾も低止せず、一回々々づゝ歩々相進んで遂に今日に至りたるものなり、世界の人文史を視るときは、此進歩の遺跡は明に讀まるゝなり、總て皆此の如

し、彼の宗教心の如きも亦此進歩の原則に洩れざるものなり。」

海野「然らむ君の學問の原理によりては、功名の心、善惡の觀念等は如何なる世紀に當りて、初めて世に現はれたりとするや。」

本城「斯の如き倉卒無用の尋問を爲す勿れ、是等の事を究めんと欲せむ、人々が尙未だ理性を備へざりし太初荒鴻の世まで遡らざるべからずと知らずや。」

直江「今の時に當りては、榮譽、良心、善惡、正邪、賞罰等の如きは、古代の遺物にして全く時世以外のものと見做すべきか。」

本城「今の時世を視れむ、然りと謂はざるを得ざるが如し、何となれむ道德、正義、榮譽等、凡て古代に燦然隆昌を極めたるものは、今日往々忘却の墓に埋没せられて、殆ど用なきものの如く見做されつゝ、あれむなり。」

淺井「君の今列擧したる道德、正義、榮譽等の中に、近代の科學は尙二三の事を加入す、宗教心、靈性の存在、及其不朽に對する信仰、神に對する崇拜等即是なり、而して近代の科學は傲然として是等のものに判決を下して曰く、實際の經驗によりて之

を檢するに、是れ皆迷信、先入、桎梏たるに外ならず、自由の精神を沮碍するものは是等のものなり、人文の進歩を妨害するものも是等のものなり、是等のものは古の幼稚時代に於ては或は益ありしならん、文明日進の今日に於ては、斷じて不可、宜しく速に排斥すべきなり云々と。」

直江「近代の學問は實に人間社會より是等のものを排斥するを以て、其目的となすが如し。」

海野「又是を以て人文の進歩に大功を樹ると思へり。」

本城「斯の如き言論は人に聞かしむべからず、餘りに奇なれむなり、昔者ウァルテール之に就て語て曰く『我庖人の前の此の如き言論を爲すを休めよ、彼若し之を聞て、無神無教の説を信するに至らむ、我を毒害するやも計り難し云々と。』」

直江「我に亦一の庖人あり、然れども彼は今日の進歩的の人間にあらず、古代の質直なる者なるを以て、斯る憂はなし。」

海野「古代は野蠻、質直は愚鈍の異名となれり。」

直江「言一時の戯の如しと雖、之を大にして國家の上より觀察するときは、愚老は今日の進歩的人間より陰險なる者はなしと思考す、今後裁判官が學校より出でたる罪人を裁判するときは、先づ第一に其影響を蒙るべし、何となれを若し上大學校より下小學校に至るまで、無神唯物主義を以て教育主義となすあらむ、裁判官は同主義を吸ひたる進歩的の人間を裁判するに當りて、大に其困難を感すべけれをなり、試に今將來の法廷を畫かんか。」

『法官「爾何故強盜を働きたるや。」學生「我慾望的分子間の引力我を驅て、人の寶匣の許に到らしめたるが故なり。」法官「然らむ何故取財を以て満足せずして、人命をも害ふに至れるや。」學生「彼人我と寶匣の間に來りて、我身の引力を遮りたるや、我身忽ち熱し來り、太く其人に衝突して、遂に一大破裂の顯象を生じたり。」法官「爾は取財の上に尙又殺人犯となれり。」學士「殺人犯とは如何なるガースの作用なるや。」法官「我其ガースを爾の腦蓋より分離せしめんが爲に、爾を斬罪に處せん。」學士「然らむ我機關破裂せん、然れども注意せられよ、我に友あり、彼亦我

と同種の浮氣體を其腦中に有す、貴官若し其人に遭遇して衝突を來さむ、貴官の裁判的ランビキは立ろに破碎せん云々。』

是れ實に原因結果の論理によりて、必ず斯くなるべき實況なりとす、愚老を以て之を見れむ、學校に於て唯物主義等を教ふるは、人民をして益々治め難き民たらしむるものにして、愚も亦太甚し、然れども近代の學問より見れむ、是亦進歩的の人間を製造するものなりと云ふか。」

淺井「是れ單だ一場の狂言に過ぎざるなり。」

直江「狂言と云ふと雖、亦是れ論理的の狂言なり、一方に於て物皆物體なりと教へつゝ、他の一方に於ては靈魂ある人の如き言動を爲さしめんと欲するは、實に是れ不合理の沙汰と謂ふべきなり。」

淺井「愚民の如きは、高等教育を解する知なければ、依然古來の靈魂説を信せしめ置くべし、爲政者より立言するときは、愚夫愚婦をして是等の迷信に遺棄するは、却て治め易さの便あり。」

直江「其れ或は然らん、然れども若し果して然りとせむ、如何なる人民に其靈魂説を聞かしむべきや、替言せむ、靈魂説の迷妄を知らしむるには、學問の如何なる程度まで人を到達せしむべきや。」

本城「翁等の談論を中絶するは、不本意の至りなれども、余の念頭に一の奇想浮び出でたれむ、幸に之を語らしめよ、若し今日の文士をして此奇想を以て一篇の小説を作らしめむ、其補益する所決して鮮少ならずと信ず。」

海野「君も亦小説を云々するか、是れ奇蹟なり。」

本城「何ぞ奇蹟と謂はん、人の能する所、我之を能せずと謂ふべけんや、況んや世の小説家の如き馬鹿真似の如きをや。」

海野「君は甚しく小説家を蔑視すれども、數多き小説家の中には、豈其人なしとせんや、开は兎も角も、先づ君の所謂奇想を語れ。」

本城「僕は單だ其骨子のみを語らん、夫れ篇中の主人公となるべき者は大學卒業生なり、其才あり識あることは、毎回試験を受くる毎に好成绩ありたるを以て知るべし、有

名なる講師に就て、備さに其教を受け、久しく其薰陶誘掖に預りたる後、割然悟達して曰く、苟も開明の民たる者は皆分子間の引力によりて己を左右せざるべからずと、又曰く自由と云ふは無限の發展力に外ならず、人文進歩の要件正しく茲に在り、故に此發展力は務めて之を養はざる可からず云々と、是に於て乎彼れ此發展力を逞うせんが爲に、花街に豪遊放吟せり、不幸にして囊中空乏を告げたり、彼れ錢無しして其發展力を伸張する能はざりしを見、行て他人の寶匣に手を觸れしが、忽ち發覺して將に捕はれんとす、此時其背力非常に激上し、引力に驅られて馳せ來れる人と暴然衝突して遂に之を殺したり、彼れ其發展の極度に達したる時、即ち其斬に處せられんとする前晚、腦髓のカーメ的思想を廻らして、遙に過ぎ越し方を回想せるに、其何故茲に到りしかを自ら解釋する能はず、怫然として怒て曰く、我は今日まで吾機能自然の發達を養ひたるのみ、而かも是れ皆大教授の教を實行して、忠誠に之を遵奉したるものなり、然るに今捕はれて支體斯く屈曲せらるゝは何ぞや、彼の講師等は傲然として今尙高坐の上より余の實行したる學理を教へつゝあるにあらざるや云々と、斯る悲憤慷慨のガース的思想

が其腦中を往來するに當り、忽ち胸部の骨匣より沸々たる激聲を出しつゝ、叫んで曰く、嗚呼社會の不合理なる何ぞ其れ此に至るや、一方には近代の科學なりと云つて之を吾人に教へしめながら、他の一方には裁判刑法等を設けて、其教を實行する者を罰せんとす、没論理も亦太甚しからずや、嗚呼奇性なる物體的の人間よ、爾は大學講師を以て眞誠なる學問を教授する者なりとして之を稱讚し、之を感驚し、又之に俸給を進呈するにわらずや、然るに其門人弟子に對しては、其先生の教を論理的に實行すると云ふを以て、之を搜索し、之を捕縛して、遂に之を死刑に處す、誰か爾を酷薄無道の人と言はざらんや云々と、叫び了つて想像を回轉せしむること數次、遂に其物體的遺言を草して、死ぬる前に之を同窓の諸子に送る、即ち是れ皆嘗て彼と共に同一の教育を受け、今も亦彼と共に同一の意見を懐ける進歩的朋友なりとす、書中記する所畢竟何事ぞ、他莫し、其友を獎勵して曰く、一死以て志を貫くべし、發展力は極度まで之を伸張すべし、從來の政治道德等を根本より改革すべし、渾て古代の迷信先入等に基く事々物々は悉く之を破却し、今後は百事百物の基礎を唯物主義の上に置き、物體の自由發展を主

張して、社會の改造を期し、以て茲に別乾坤を闢くべし云々と、夫れ此種の趣向を以て一篇の小説を作らむ、其裨益する所豈亦大ならずや。」

海野「唯物主義の結果を見て而る後に小説を作らんよりは、先づ小説を作て以て豫め唯物主義の結果を示すの優れるに如かず、經驗の教訓は許多の損害を拂て後初めて得らるゝものなれむなり。」

淺井君「君等は論ずるにわらず、戯るゝのみ、斯る奇怪の事を前提するは、近代の科學を耻辱するも亦太甚し、僕は決して此の如く極端に到るを信せざるなり、夫れ正義をして地を拂はしむることは不能の一事、世豈之を容さんや。」

本城「僕は君自身が此の如き極端に到達すべしとは言はず、君の天職は唯だ原義を提出するに在るなり、之が結論を實行の上に引出すものは、君にわらず、民なり、君若し近代の科學を憑據として以て、民に教ふるに、人には靈魂なるものなし、善惡の觀の如きは先入のみ、世人の良心と稱するものは是れ唯だ迷信なり、人解體して其身の分子各々其元素に復歸するときは、全く死滅して萬事茲に休するものなり、未來の賞

爵の如きは畢竟是れ空想のみ云々等の事を以てするあらむ、民は直に此行ひ易う教を受けて、忽ち之を實行せん、而して其實行人民一般に及ぶ時は、即是れ世界の局面の一變すべき時なり、明言せむ、世界滅亡の期茲に在るなり。」

浅井「君も亦極端の結論を下す者なり、且は今の時世をのみ罪すれども、古の代にも亦其罪すべき惡逆の在りしを知らずや。」

直江「古の事は愚老の論すべき領分なり、然り、古の代にも之ありたり、然れども今とは大に其趣を異にせり、古は惡逆の行はれたるや、當時の道學宗教等の主義に背て行はれたり、當時の道學、宗教等は決して之を許容したるにあらず、蓋し其滔天の勢を全く制すること能はざりしに由れり、今や然らず、所謂新學問、新倫理なるものは、之を制せざるのみならず、自ら進んで其傾向しつゝある處に之を失墜せしめんとす、言少しく酷なれども、情慾の鞭を放つて惡逆の淵に人を顛倒せしむる者は、即是れ今日の開けたる學問なり。」

本城「翁は舊幕時代の遺風によりて語る、其判断の當らざるや宜なり、夫れ古に罪逆

のありたるは、當時の學問國法等の天性自然の傾向に背反したるが爲なり、今や世は大に進歩し來りて、天性自然の傾向のみ之が法律となれり、是に於て乎罪逆なる者は忽ち其跡を絶つに至れり、此議論や、實に是れ進歩的新議論なりとす。」

直江「如何にも然り、新原理を定立し置くときは、吾人盜賊に遭ふも、殺戮に遇ふも、皆是れ論理的の結論なりと會得せざるべからず。」

浅井「過言々亦太甚しからずや。」

直江「如何なるを是れ過言と謂ふや。」

浅井「過言とは一の原理中より其包含せざる結論までをも引出するを謂ふなり、試に一考せられよ、唯物主義の原理より、盜賊殺人等の結果如何にして引出せらるべきや。」直江「勿論君の唯物主義は直接人に強盜せよとは言はず、然れども人の強盜たるを妨ぐる制度を學問的に破却するにあらずや、其説に曰く人は自由に飛躍せざるべからず、天下何物か自然の發展力を阻碍すべきものぞ、進歩的法律は宜しく人に自由の發達を遂げしめざるべからず、蓋し人は身躬ら其生命、其行動、及其命運の主宰者たれをな

り云々と、人をして強盗たらしむるには是れ亦足る、何ぞ其餘を要せん。」

本城「堤坊を破るときは、河水に向つて此穴より流出せよと命ずるを要せず、水は自然の傾向に従て遠慮なく其到る處に到るものなり、而して其堤坊を破る大なるときは、河の勢、水の方も亦大にして、人の命を待たず、否、人の制するをも待たず、蕩々浩浩として沃野千里を縦横自在に奔流衝突す。」

浅井「君は人と水とを同一視して論ずれども、其比喻當らず、有機物の法則は無機物のとは異なり、唯物主義によりても人は知識ある者なり、水は然らず、夫れ知識ある者は能く己の事を知る、能く己の事を知る者は己の利樂に反する事を爲さず、然り而して人を害するは即是れ間接に己を害する所以なり、何となれを被害者は加害者に執ゆることを忘れざれむなり、是故に己を愛する者は亦人をも愛し、己を害せざらんと欲する者は亦人をも害せず、是に於て乎正義は自然に行はる。」

本城「僕の見を以てせむ、君も亦過言者の一人なるのみならず、尙其上一の盜賊なりと謂ふべし。」

浅井「盜賊とは何ぞや、戯言も程こそあれ。」

本城「君も亦怒るか、物體の怒るも亦妙なり、夫れ君は人間より其理性及其道德的行爲等を盗んで、之々頑冥なる物塊に與ふる者にあらずや、盜賊にあらずして何ぞや、君は人間の盜賊なり、試に彼の器械を視よ、如何に整頓し、如何に完備すと雖、自ら行動するものにあらず、況んや自ら其行動を左右規畫するをや、然り而して彼の正義なるもの、仁愛なるものは、果して如何なるものとなすや、是れ道なり、徳なり、此の道と徳とは、之を實行の上より言ふときは、己に利なる所をも殺ぎ、己に害なる所をも忍んで以て益を人に施すに在るなり、故に道德者となるには強勇の者にあらずんば能はず、徳の語は力と云ふ名詞より出で來れるを知らずや、是に由りて之を觀れむ、君の如く人を以て一の物體としながら、(隨て之を器械視しながら)、而かも猶且之を徳の範圍の中に行動せしめんと欲する者あらむ、我之を盜賊と言ふを憚からざるなり、何となれを無形の靈魂より其高尚なる特有の美質(理性)を盗み來つて、之を物體に衣せんと欲するものなれむなり。」

淺井「然らむ則ち君の意見に據るときは、唯物論者は到底道德者となるを得じと思ふヤ。」

本城「僕は之に答ふるに先だち、先づ人、其主義との間に區別を立て、論せざるべからず、蓋し人々の中には靈性論を唱道しつゝ、不道德を爲す者もあれど、唯物論を主張しつゝ、其道德を示す者もあれど、然れども二者孰れも不合理なり、前者は其主義に背反せる行をなし、後者は其主義以外の事をなせむなり、即ち其言行の一致を缺くに至つてや、彼此全く同一轍に歸す、今此の如き不合理の言行を離れて、理論の上より合理的に論ずるときは、唯物論者は斷じて道德者たるべき謂れなし、是れ論理なり。」

淺井「何を以て之を言ふ耶、道德なるものは單に身を苦殺するのみに在らず、歡樂の點に於ても亦之あり。」

本城「道德にも亦歡樂あるの語は、一個の意を寓す、故に區別して論せざるべからず、歡樂の中には道德に隨伴するものもあり、彼の善事を行へりと云ふ自得心（中心の満足）の如きは即ち其一なり、然れども此歡樂たるや、物體的の歡樂とは大に其性質を

異にす、其證據は物體的の苦痛を忍べむ忍ぶ程、其歡樂増進するを見て知るべきなり、勿論物體的の歡樂と雖、道德事業に隨伴せざることをなきにしもあらず、彼の有機體が道德に背反せざる事業を施行するを以て、一の樂となすが如き時即是なり、斯る場合には唯物論者と雖尙道德者たらざる得ざるにあらず、然れども是れ其主義の爲に然るにあらずし、偶然によりて然るものなり、蓋し其利益其歡樂が折善く道德の定規に適合したるに在るを以てなり、彼等にして若し論理的ならんか、感覺的利害の外毫も關する所あらざる者なり、彼等の行動の唯一なる發動機は私利私益のみ、見るべし、唯物主義は全然道德と反對なることを、其主義が理論上如何なる美事美德を唱道するも、畢竟「利己」の二字を以て世界唯一の法となすものなるを以て、到底眞誠なる道德者を作爲する能はず、斯の如き主義にして献身、克己等の事を唱ふるが如きは、抱腹絶倒、笑止の至なり。」

直江「然れども若し此の如き事を以て進歩となさむ、吾人は頗る進歩し來れりと謂ふ可し、數年來の趨勢を見るに、吾人の歩は此方向に向ひ、一瀉千里の勢を以て進行した

り、今後猶ほ此勢を以て進まむ、唯物主義は遂に天下を支配するに至るべし、然れども愚者は敢て問はんとす、其時の社會は果して如何なるべきやと。」

本城「其時社會は二つに分れん、得意の社會と失意の社會即是なり、前者は着々其目的を達して、飽まで食ひ、暖かに衣、終日逸居して以て其身日に満々、其腹月に便々たらん、有名なる詩人ホラシウスは此肥滿社會を巧に形容して曰く『エビコール群の豕なり』と、余は敢て之を公言するを憚る者なり、後者は之に反して輾轉頓踏、其生日に盛まり、風雨に觸れ、寒暑に犯され、遂に饑渴の餘りに、呼號して以て前者の甘食社會に通り、怨恨の牙を鳴らし、憎惡の齒を示し、早晚甘食社會の洋々たる樂を滅却するに至らんとす、吾人は其時論語より形容詞を拜借して云はんとす、曰く『暴虎馘河の勢なり』と、然れども此時に當りては、豕社會は虎社會を制壓するの權もなく、力もなけん、何となれむ此社會は物皆物體主義なるを以て、道德的の制裁は毫も力なく、唯だ強者の權利のみ行はるべけれむなり、是に由りて之を觀れむ、唯物主義の社會は一言以て之を蔽ふ可し、曰く『豕と虎』。」

淺井「君は愈々出で、愈々極端の議論に走れり、僕は殆んど之を聞くに堪へず、夫れ言論の上には如何なる事をも語るを得、然れども敢て問ふ、君は實際に於て果して之を見たることありや。」

本城「否我何處にも之を見たることなし、固より是れ唯だ理論上の言のみ、唯物主義を實行するに至らむ、必ず此結果に至るべしと論じたるのみ、然り而して實際に於て此結果に至らざるは何ぞや、他莫し、人性は決して全く滅却せらるべきものにあらざれむなり、亦決して全く腐化せらるべきものにもあらざれむなり、天良の心は深く人間に銘刻せられあるを以て、性に背戻して事を行はんとする毎に、必ず之に反抗す、譎辨怪論を作爲して以て如何に其力を殺がんとするも、斯の如き大惡の結果を社會に來すを容許するまで薄弱となるものにはあらず(是れ其一證)……次に博物史上より呈出せられたる一の格言あり、格言と云はんよりは寧ろ法則と謂ふべきものなり、曰く『性は怪を殺す』と、之を解せむ、天性一定の種族に屬せざる怪物は永續せず、必ず死すと云ふ事なり、其物生存すと雖、永く其代を傳ふること能はざるは、實驗上動かすべ

からざる事實なりとす、此法則は則ち吾人の議論にも應用するを得るなり、夫れ唯物主義の社會は一の怪物なり、天性之を許さず、其生存決して永續するものにあらず、或は無政府となりて滅却し、或は腐敗に歸して朽蝕せんこと、日を期して待つべきなり（是れ其二證）。」

直江「愚老願くは此の如き不吉の結果を見ざらんことを欲す、然れども嗚呼如何なる不幸ぞ、此の如き結果の臭氣早や既に吾人の風紀の上に上り來れるが如し、今にして速に之を救治せずんば、上より下に加はり、民より民に傳はり、早晚汚氣紛然として鼻を衝くの社會を現出するに至らん、是時に至りて名譽心を云々し、廉耻心を喋々するも、亦何かあらん、現に今日に在りても、惡を爲して恬然耻を知らざる者は多く之あり、社會の公德は充分之を制するに力なし、而して日一日に其力を失ひつゝあるが如し、此勢を以て進まむ、破廉耻、無節操、沒道義等の敗徳汚行は靡然天下を横領して、風紀の頽敗、道德の紊亂、言ふに忍びざるに至らんこと、鏡に懸けて睹るよりも明なり。」

本城「嗟乎時は來れり、時は來れり、時は鬢々として來れり、日ならずして民皆罪人に左祖して、公然裁判官に反抗の叫聲を放つに至らんとす。」

海野「未だし、斯くまで進みたる日には迷感至極なり、今や既に或る罪人は公然天下の輿論を蔑如せり、否、此を以て名譽の事業なりと自負するに至れり、社會も茲まで進歩せむ、是亦足る。」

直江「嗟乎吾人、所謂武士道なるもの今それ焉くにか在る。」

本城「斯の如き場合に際しては、吾人將た如何すべき、常套の言かは知らざれども大聲以て『汚辱に生ずる者は、生ずるの價値なき者なり』(Qui peut vivre en Infame est indigne de vivre)の語を叫ぶざるべからず、吾人は實に此の如き卑劣漢と相俱に齒するを耻づ、然れども糞中の臭虫は自ら其臭を知らずして、吾人を以て尙未だ先入迷信の臭氣を脱せずと言はん。」

直江「先入迷信何を關せん、我を馬と呼む、馬と呼むしめよ、我を鹿と呼む、鹿と呼むしめよ、今や此の如き事に顧慮すべき時にあらず、一日も早く政治道德等を支撐する柱

石を立つるを要す、然らずんば天下蒼生を奈何せん、今日の唯物主義は今迄社會を暴略し來れる力に尙一層の勢を加へて、宛も堤坊を潰決する河水の如し、政治や、道德や將さに其急湍の中に葬られんとす。」

海野「徒に惡逆を叫びて危害呼りするも、實際に益なし、要は之を避くるに在り、而して之を避くるに道あり、其原由を亡ぼす事はなり。」

淺井「今にして唯物主義を亡ぼさんとするは、學問其物を亡ぼすに當るなり。」

本城「否然らず、是れ單だ學問を奇怪なる誤謬より救治洗滌するまでのみ、唯物主義なる怪物は、學問をして有害物とならしめたるのみならず、今や殆んど之を殺さんどせり、果然怪物は永存すべきものにあらざるなり。」

淺井「君等は此の如くして遂に我唯物主義に死刑の宣告を下せり。」

本城「然れども君は勇しく戦へり、僕は君の心の質直にして且義に勇なるを看取せり。」

淺井「僕今日まで我説を主張し來れるは、實に中心より之を眞なりと思へむなり、剛愎以て眞理に反抗するが如き、豈正義の士と謂ふべけんや、僕は眞理を見む必ず將に質

直に降服を爲さんとするものなり、僕不肖と雖、昔者プラトンの弟子が其師に就て語りたると同一の見を有す、曰く『プラトンを友とするよりは、寧ろ眞理を友とする者なり』(Amicus Plato magis amica veritas)。」

直江「君も亦快男子なる哉、君は其主義は唯物主義なれども、其心は高崇勇大にして、之が反對を表明するものなり、愚老は未だ曾て物體の特質にして此の如く思考し、此の如く言論したる者を聞見したることなし、蓋し君に於て初めて之を見る、幸福なる反對家と謂ふ可きなり、吾人は君を多とす、芽出度し〜〜。」

警醒時論 畢

明治三十一年一月三十日印刷
明治三十一年二月四日發行

著者

リギヨール

譯者

前田長太

發行者

東京市京橋區新榮町六丁目卅五番地
東京市京橋區木挽町一丁目十四番地
石川音次郎

發兌元

東京市京橋區銀坐三丁目十五番地
文海堂

賣捌所

東京市京橋區銀坐二丁目九番地
大倉分店

印刷者

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
河本龜之助

印刷所

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
國光社印刷所



